

雄英でピエロは嗤う

ヨシフ書記長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕のヒーローアカデミアにあのヴィラン達（犯罪界の道化王子など）が出てきたら面白そうだなあ〜と思ったので書きました

駄作ですが…どうぞ

目次

プロローグ	1
集う悪意	6
デモンストレーション	10
狂気感染1	18
狂気感染2	26
悪の爪痕	34
水中の殺し屋	44
USJ襲撃事件前 (Side ヴイラン)	54
USJ襲撃事件前 (Side ヒーロー)	62
狂宴の始まり	72
狂宴1	81
狂宴2	89
狂宴3	96

プロローグ

ある子供達が遊んでいる公園に…

自転車に乗り、顔をお面で隠した男がやって来た…

その男は、公園の少し山のようになつたところに

自転車を止めるところ言いました

「おうい〜！坊主共オ〜！寄ってらっしやい！見てらっしやい！

紙芝居の時間だよオ〜！」

すると、男の声に公園の子供達は

男の方を見ると、皆駆け寄っていった

「はいはい！押すんじゃねえぞお？慌てるなあ？フフツ…ク」

そう言うと、男は自転車の荷台に

紙芝居の用意を始めました

子供達はその様子を見ています

男はこちらを見るなり言いました

「おつと〜！そうだった〜！こっ、ただ待つてるのも嫌だなあ？

ん？〜？そうだろ？」

そう言うと、男は自転車の前カゴに積んでいたアイスボックスを

地面に下ろすと言った

「ほらよ！ガキンチョ共、このアイスキャンデーでも舐めながらまつ

ときな！〜！ひひっ！」

そう言うと、男はクーラーボックスを開けました

すると中にはとても鮮やかなアイスキャンデーが

沢山入っていました

子供達は男の方をもう一度見ると男は言いました

「おお〜！つと〜！まさか、この俺がお前から金を取ると思うのか？

安心して食べな！そいつア…無料だぜえ？クフツ！」

男の言葉に子供達は一斉にアイスボックスに手を突っ込み

キャンデーを掴むと舐め始めました

子供達がキャンデーを舐め始めると同時に

男は紙芝居をやり始めました

「さあさあさあ！楽しい！楽しい！紙芝居の始まりだア！」

男はそう言うと、表の白紙だった板を外しました

そこに書かれていたのは『闇の騎士の喜劇』と書かれた
手作り丸出しの紙芝居でした…

男は、急に話を始めました

「ある所に犯罪がなくならない街があった…

その街じゃあ…殺人に強盗なんて日常茶飯事

犯罪者は我が物顔で街を歩き

マフィアは力をつけ、司法でも手が出せなくなり

街の正義のはずの警察では汚職が蔓延っており

手をつけられない状態だった…」

男はまた紙芝居をめくると

そこには俯いた人々の悲しい絵があった

男はさらに続けます

「この街の人々は、いつも俯いて暗い顔をしていた

この街の状況の全てに人々は絶望していたからだ…」

男は先程よりも落ち込んだような声出していた

すると、突然！

「しかあし！そんな街をどうにかしよう！」

ある二人の男が立ち上がったのさ！」

男は声を急に張り上げると

また紙芝居をめくった

そこには、黒いコスチュームを着た男が立っていた

「まず、初めの男は…！犯罪を憎み、この街から犯罪者を無くしようと

馬鹿な警察共が変わって、自警団を作り…！

そしてえ！ダークヒーローになったあ！ヒヒツ！」

男は興奮した様子でさらに言った

「男は、闇夜に紛れて犯罪者を倒し、弱者を救い続けた！」

しかし…！っと男は先程よりも

少し声のトーン落として言った

「男がダークヒーローとして活動を始めると…

！
街の連中は男を恐れて、男をまるでヴィランと同じように見たのさ

さらに街の犯罪者の中には自分の『個性』をうまく使い始め…

！
犯罪者達のリーダーになり、ダークヒーローを苦しめ始めたのさ

そんな街のヴィランの1例を紹介しよう…つと男が言うと

また紙芝居をめくった

そこには3人のヴィランの指名手配書が貼られていた

「いいか？まず…！」

一番左のシルクハット被った小男からだあ…！」

このヴィランの名前はペンギン！

個性は『鳥操作』だ！

そして、真ん中の緑色の？柄のスーツを着たこの男！

このヴィランの名前はリドラー！

個性は『超頭脳』

そして、最後の体の片面が焼け爛れて…

左右非対称なこのヴィランの名前は！！

トウーフエイストツ！

！
個性はあ…！つと！これ以上のネタバレはいけないな！フフツ

男はさらに紙芝居をめくると

そこには先ほどのダークヒーローが

そのヴィランと戦っている絵でした

「ダークヒーローは、そんなヴィランが出てきても

ダークヒーローは挫けずに！街の平和の為に戦い続けた…

しかし！街の人々の顔が明るくなる事は無かった！

ダークヒーローの存在はこの街のイカレ具合に

拍車をかけただけに過ぎなかった！」

そこで！男はさらに紙芝居をめくりました

そこにはまた違う男が描かれていました

その男の絵はまるでピエロの様に白い肌で

紫色のスーツに身を包み：骸骨を持ちながら
正面を向きながら狂気的笑みを浮かべていた

「もう1人の男は！ある事を思ったのさ！

『このイカれた街にはSMILEが足りてない！』

そうと思った男はこの街の人々を笑わせて

この俺のジョークで天国に連れてってやろうと思ったのさ！

まあ：でも、本当に天国にイツちまったがなあ！

ヒヤーツ！ハハツハハツハハツハハツハハツハハツノ、ノ

、ツ！ハハハ！」

男は急に腹を抑えると笑い出した

少しすると落ち着いたのか、また子供達を見ると言った

「フウ：フウ：：ククツ！おっと！笑いすぎたな！

でも、笑う事はいい事なんだぜ？

俺のお抱えの医者が笑顔は薬にもなるって言ってたからな！

さ！さあ！続きだ！」

男はまためくると

そこにはダークヒーローとピエロ男が

街の人々の死体の上で戦っている絵でした

「ダークヒーローはその男をヴィランと見なし戦った！

しかし！ダークヒーローとその男の存在は

光と影と同じで永遠に戦い続ける運命にあるのです！

さあ！混沌にまみれたこのイカれたショーは何処まで？

いや！いつまで続くんだろおなあ？ダークナイトお！

ヒヒツ！ハハツハハツハハツハハツハハツハハツハハツノ、ノ

、ツノ、ノ／＼ツ／＼！」

男はまた笑い出すと、子供達の方を見た

子供達は溶けてデロデロになったアイスクャンデーを手に持ちながら

顔は歯がむき出しになりながら引きつった笑顔を

浮かべながら、カスれた笑い声を漏らしていた：。

「嗚呼……いい笑顔だ！ガキンチョ共オ！」

ヒヤツハツハツハーフフフ！」

男はそう言うのと自転車の荷台にあつた紙芝居の台を

子供たちの方にぶん投げたが

子供達は避けることもせず

まるで置物のようにそれにぶち当たつた

男はその光景を楽しそうに笑い

お面を脱ぎ捨てて、自転車に乗ると

新聞を取り出し読んだ

そこには……！

『平和の象徴』オールマイトと闇の騎士の夢の会談！

闇の騎士来日！

雄英高校に特別講師として招かれる？』

「フフフ……なかなかこの大男！いいスマイルじゃないか！

まあ！このジョーカー様には負けるがな！

それに！バツツイもやってくる！

これは楽しいパーティーになりそうだ！アーツハツハツハツ

ハツハツハ！」

そう言うのとジョーカーは、新聞投げると

自転車を漕ぎだした

落ちた新聞のオールマイトの記事の裏面にはこう書かれていた

『ヴィラン連合と海外のヴィラン組織が結託か！何が目的か？』

雄英に、オールマイトに、狂気の魔の手が

今まさに迫ろうとしていた！

集う悪意

薄暗い雑居ビルのある一室…

そこは、ヴィラン連合の隠れ家だった

そこにはbarカウンタ―があり、barの中では黒霧が
コップを吹きつつ…

目の前に座る死柄木弔を見ていた

「ハア…。」

死柄木は大きなため息をつく、グラスに入った酒を飲み干した…
そして、グラスをカウンタ―に置くとまた大きくため息ついた。

「どうしたんです？ 死柄木弔？ なにか嫌なことでも？」

「ああ？ 嫌なこと？ これに決まってるんだろ？」

死柄木はそう言うと、新聞を掴み黒霧の方に向けた。

そこには、ダークナイトの来日の記事とオールマイトとの会談につ
いて書かれていた。

「オールマイトみたいなやつがまた街に増える…。」

それだけでもイライラする」

そう言うと、死柄木は首をガリガリとかき始めた

黒霧は少し困った表情を見せたあと、ため息を付き言った

「仕方ありませんよ…。死柄木弔…。」

ダークナイトとオールマイトは旧知の仲…。

ましてや、あの治安の悪いゴッサム・シティの守護しているヒー
ローですから…。」

「嗚呼…。こいつも壊してえなあ…。無茶苦茶にい…！」

死柄木がそんな言葉をこぼした瞬間！

急に入口の扉が開かれた！

「そいつには、同感だな！ 小僧！ グアア！ グアッグクアグア！」

「おいおい…。勝手に入っていくなよお…。」

扉の所には、義爛と一人の小男が立っていた

その男は、シルクハットを被り

片眼鏡をかけ、片手には黒い傘を持ち

服は燕尾服を着ていた

「おい……黒霧イ……なんだあ？こいつあ？」

その小男を見た死柄木が苛立たしく
言葉を荒らげながら黒霧の方を見た。

「我々が計画している雄英襲撃計画……」

オールマイトだけなら、脳無だけでどうにかなっただんですが……

……
ダークナイトが来日した事により……少し計画が変更になりました

……
ダークナイトと対峙した事ない我々よりも

……
普段戦っておられるヴィランを雇えば、現実性が増すかと思いまし
て

先日……彼らを脱獄させました」

黒霧の言葉に死柄木は黒霧を睨むと

手を大きく広げながら黒霧の方に向けて言った

「おい……黒霧イ！計画変更だど？誰が計画を変更したんだア？」

何で？俺に黙ってたんだあ？」

死柄木の言葉に黒霧はすぐ言い返した

「全ては……先生の指示だからです……」

「先生が……チツ！」

すると、義爛が煙管をふかしながら言った

「話はまとまったかい？」

黒霧は義爛を見ると言った

「まずは、この紳士小男の名は……ペンギン。」

ゴツサム・シティの武器ブローカーにして、ペンギンファミリーの
ボスだ……」

「オズワルドだ！宜しくな！小僧！」

ペンギンはそう言うと、死柄木に近づき片手を突き出した

「あん？なんの真似だ？チビのおっさん？義爛から聞かされてねえの
か？」

「なんでエ？握手も知らねえのか？最近の小僧は？」

「俺の個性は義爛から教えられてねえのか？」

「まつー！いいじやねえか！」

これからのパートナーとは握手しとくべきだぞ？小僧！」

ペンギンはそう言うと、死柄木の手と握手したその瞬間……！

ペンギンの片手の革手袋がボロボロに崩壊した

「おおーこいつぁ……！すげえ威力だ！」

ペンギンは面白げにボロボロになった革手袋を見ると、目を輝かせた

義爛は、さらに言った

「フウーツ。おうい……。あんたも入ってくれ」

すると、入口の外から異様な男が入ってきた

その男は片方は白、片方は黒のスーツを着て

片手にはコインを大切に弄び

顔は片方はイケメンだが、もう一つの片方は焼け爛れて

見るに堪えない顔だった

「この二面男の名は……。トウーフフェイス……」

ゴツサム・シテイでのトウーフフェイスファミリーのボスだ」

すると、トウーフフェイスは死柄木の前でコイントスをするといった

「こいつらと手を結ぶべきか……？いや、こいつらを殺すべきだ！」

あの憎きコブルポットもいる……！さらにあのクラウンも！

しかし、こいつらと手を結ばなければ……ダークナイトを倒せない

！」

トウーフフェイスの言葉にイラついたのか

ペンギンは憎まれ口を叩いた

「俺だって、お前とは手を結びたくは無いさ！ハービーイ！」

そして、あのピエロともな！

だが！この絶好の機会だ！失敗はしたくねえ！」

「うるさいぞ……！コブルポットオ！」

このコインでお前の運命も占ってやってもいいんだぜ？」

「やって見ろー……この二つ顔野郎！」

「なんだと……このチビが！」

ペンギンとトウーフフェイスが喧嘩しそうになった瞬間

黒霧が黒いモヤでトゥーフエイズ達を止めた

「いい加減にしてください…。二人共、これ以上は危険です…。」

「ふん！」

「けっ！」

死柄木はトゥーフエイズを見ると言った

「それで？あんた達は何が出来るんだ？」

「ああ…と、それ何だが…。その前に面白い物を見せてやるよ…。」

義爛はそう言うのと外から手で下げれるTVを持ってきた

そのTVには緑色の？が書いてあった

「よいしょつと…。実はな…この二人の他に

もう2人来る予定だったんだが…

少しアンタらに見せたいもんがあるってんで、1人は街に行つててな？

それに、この2人のファミリーの構成員の力をアンタらに見てもらふ為に少し街で暴れるんだと…。

それでこいつで見せてやってくれって頼まれてんだ…。」

義爛はTVに電源をつけた

さらに、死柄木は義爛の言葉に目を大きく開きながら

TV画面を見つめるのだった

デモンストレーション

オールマイトはある部屋の一室である男を待っていた。

すると、部屋のドアがノックされ、一人のヒーローが入って来た。そのヒーローは全身黒づくめでコウモリのような格好をしていた。オールマイトはそのヒーローに気づくと近づいて握手をした。

「久しぶりだね！バットマン…いや、ウエイン！」

オールマイトはそう言うのとバットマンはマスク越しに言った

「ああ…、久しぶりだ。わざわざ済まない。私の為に…。」

バットマンの言葉にオールマイトはニコツと笑いながら言った。

「なあに！構わないさ！親友がせっかくこつちに来たんだ！会わないのが失礼だろう？」

オールマイトの言葉にバットマンは嬉しそうに笑うと言った。

「ああ…、ありがとう。」

「それで？本題に入ろうか…。雄英学校の特別講師になる為に来たというのは…本当かい？」

オールマイトの言葉にバットマンは言った。

「ああ…、それ何だが…。実はな…。」

バットマンは伏せ目がちになりながら言った。

「周りに働きすぎだ！と言われてな。休めと言われてたんだが…何分。

あの街は危険があるから休めんかったんだが…他のヒーロー達に代わりに治安維持を任せろと言われてな…。渋々、休みを取ってこつちに来たんだが…どうも何かしないとイケない気がして…。」

バットマンは溜息をつきながらそう言った。

その様子を見ていたオールマイトは言った。

「うーん…ワーカーホリックツツ！まあ…そういう私もヒーロー活動をせずにはいられないが！」

オールマイトはそう言うところある事を思い出し言った

「休みを取ってこつちに来たのはいいいけど…ゴツサムシテイのヴィランは君がないのをいい事に暴れるんじゃないのかい？」

オールマイトの言葉にバットマンは苦笑いをしながら言った。

「それなら…大丈夫だ。主要なヴィランは捕まえてアーカムに収監した。もし…残っていたとしてもロビン達が捕まえるだろう…。」

バットマンの言葉にオールマイトはニカツと笑うと言った。

「そうかい！それなら…安心だね！じゃあ…歓迎するよ！雄英高校に！」

「ああ…。宜しく！オールマイト」

バットマン達が握手をした瞬間…！

バットマンの付けている無線機が鳴った。

バットマンは無線に出ると衝撃的なこと知らされた。

「私だ…アルフレッド。ああ…！何！ジョーカー達が!」

バットマンのただならぬ様子にオールマイトは言った。

「どうしたんだい？バットマン！」

「ジョーカーがアーカムから行方をくらませたらしい…。」

ほかのヴィラン達もだ…。」

「何だって！それは一大事だ！」

オールマイトがそう言っていると部屋のドアが勢いよく開け放たれると、プレゼントマイクが入って来た…！

「やべえよ！オールマイト！テレビつけてみる！」

オールマイトはプレゼントマイクの言葉に慌ててテレビをつけた。

—————

死柄木は砂嵐からゆつくり綺麗になっていく画面を見つめた。

そこには、どこかのスタジオが映っていた

すると、カメラが急に動き出しステージの真ん中を写し始めた。

急な暗転と共にドラムロールが鳴り響き、ステージの真ん中から白いガスと共にある男が現れた。その事は煙が晴れる前にマイクを持ちながら言った。

「レディース&ジェントルメン！こんにちは、こんばんわ！日本の皆様！フフツ!!」

煙が貼れると、そこには狂気的な笑みを浮かべた男が立っていた。

「俺こそはあく！犯罪界の道化王子！ジョーカー様だア！ヒヤーツ！ハツハハハハハハ！」

ジョーカーは笑いながらそう言うとお辞儀をするとカメラをみつめて言った。

「ん？なあんでゴツサムのヴィランの俺様が日本にいるかつてえ？

知りたいかあい？クフフ！」

ジョーカーはそう言う胸もとから取り出した写真をカメラに近づけた。その写真にはバットマンが写っていた。

「俺様の愛しのダーリンが…俺様をほつといて日本に旅行に来てるそうなんだが…。何だか…壊したくなってきてなあ？フフツ！」

ジョーカーはそう言いながら写真をクシャクシャにして捨てることさらに言った。

「そんな訳で俺様達も！すこし日本に旅行に来てるって訳だ！」

俺様は、日本が好きでなあ？スシだろ？スモウだろ？フジヤマ！あとは…。そうそう！ハラキリ・シヨード！あんなジョークが日本にあるなんて思いもしなかったぜ！ヒヒヒ！ヒャーハツハツハハアーツハツハツハ！」

ジョーカーは笑い転げると突然立ち上がり言った。

「おおうつと…！そうだった！この日本に来てるのは俺様だけじゃあなかったぜ！それじゃあ少し紹介しようじゃねえか！ヒヒヒツ！」

ジョーカーはそう言うその後ろの画面にスイッチを入れた

その画面には…燃え盛る街の映像が映し出された。

キヤーツ！助けてえ！

熱いよオ！！

また火がア！

うわあああ！

至る所で民間人の助けを呼ぶ声がこだましていた。

その燃え盛る街の上空を飛びながら1人のヴィランが街を見なが

ら笑っていた。

「ハアっバツハっバツハア！燃えろお！もつと燃えろお！真っ赤に燃え続けろお！」

このヴィランの名前は：ファイヤー・フライ。

個性は、火炎操作！

炎を操ることの出来る個性で空を飛ぶ事ができる。

体の90%が火傷に覆われていて、虫のようなゴータルと酸素マスクを着けた街を燃やすのが大好きな放火魔である。

ファイヤー・フライは片手に持った火炎放射器の引き金を引きながら、消火しようとするヒーローに向かって飛んでいった。

「しようもねえ事をすんじゃねえよ！ハア！バツバツハっバツハ！」

ファイヤー・フライが燃やしてる街の隣では街が凍っていつていた！

「クソっ！やつに攻撃をする前にすべて凍って落ちてしまう！」

「他のヒーロー達に早く応援を！」

「早く住民を避難させねえと！」

ヒーロー達がそう言っていると、ヒーローの一人がなにかに気付いた。

「おい！これって！」

「まさか！Mr. カッター!!」

「凍ってやがる！あの野郎！」

ヒーロー達が凍らされたヒーローを見ながらそう言っていると、何かが近づいてきた。ヒーローの一人がそれに気づくと一気に凍らされた。

「奴だ！」

ヒーロー達の目線の先には：白い冷気の先に赤い目が見えたと思ふと

冷気の中からロボットのようなコスチュームを着たヴィランが現れた。そのヴィランは頭に丸い宇宙服の様なもの被り、目には丸い赤いサングラスをかけて、手には冷凍銃を担いでいた。

このヴィランの名前は…Mr. フリーズ！

個性は、絶対零度！触れたものを瞬く間に凍らせたり、体から超低温の冷気を出せたりできる。冷凍銃はその冷気を充填して撃つている。

「全て…全て凍るがいい…」

フリーズはそう言うのとヒーロー達に向けて冷凍銃を撃った…。

フリーズが凍らせてる街の隣では…ガスが立ち込めていた。

「ゴホッ…ゴホッ！救助要請を聞いてきてみれば…。なんだこの街の有様は…」

「確かにそうね…上からでも下が見えないわ…。」

Mtレディはそう言いながら、足元の街を見た。

不気味に街はガスに覆われていた。

すると、先行していたヒーローが突然叫び出した！

「うわあああ！虫が！虫がアアア！カラダニイイ！」

「！何があったの！今助けてあげるわ！」

その叫び声を聞いたMtレディは慌てて手でヒーローを救いあげようとしやがんだ…その時！Mtレディの足に何かが刺さった！

「痛っ…！」

Mtレディは自分の足を見みると足にはナイフが一本刺さっていた。

「何…これ？ナイフ？」

足に刺さっていたナイフを引き抜くとMtレディの耳元で

男の声が聞こえてきた。

「おやおや？ずいぶんと大きな子猫ちゃんだ…！これは…俺の体に残すキズに相応しいっ！」

男はそう言うときMtレディの首向かってナイフを突き立てようとしたが

Mtレディは慌ててその男を掴んだ！

「…！捕まえたわ！大人しくなさい！痛っ！」

男はナイフをMtレディの手に突き立てると脱出した。

Mtレディはその男の方を見た。

その男は体に毛が一切無く…暗い目がギョロつとこちらを見ており、

身体中には何かの印のような傷が付いていた。

このヴィランの名はMr. ザズー。

個性は切断…！持ったナイフなどの切断力を強くしたり、痛みを増加させたりできる個性である。このヴィランは人を殺す度に体に傷を残すのが自分のルールとしてる切り裂き魔である。

「大人しく…しないとちゃんと殺せないじゃないかあ…」

「貴方…ヴィランね！覚悟なさい！」

Mtレディはズズーを見下ろしながらそういつた瞬間！

下のガスで見えない街から声が聞こえてきた。

「ヒヤハハハハハ！流石は…ヒーロー…と言いたいところだが…」

「なに？…またヴィラン？」

すると、ガスに覆われた街から何者かがMtレディに向かって飛んできた。Mtレディはすかさず防御の姿勢をとったが…そいつはMtレディに向かってガスを発射した。

「うっ…い・ゴホッ！ゴホッ！」

Mtレディは咳き込むとそのガスを発射した奴を見た。

そのヴィランは、服はボロボロで、頭には三角帽子と顔には案山子のようなガスマスクを付けたヴィランだった。

このヴィランの名前はスケアクロウ！

個性は、恐怖ガス。このガスを吸ったものは自分の一番恐怖をするものが幻覚として見え始める。

「何…よ。これはああ…いやああああ！」

Mtレディは目の前にいるヴィランではなく、大量のゴキブリが足を登ってくる幻覚が見えた。

「さあて…？…お嬢さん？君の恐怖はなんだろうねえ？」

スケアクロウたちが暴れている街の横では植物が暴れていた！

「うわあああ！足がああ！」

「食われるううう！」

逃げ惑う人々を見ながら、大きな花の上に乗った女は笑っていた。

このヴィランの名前は、ポイズン・アイビー。
個性は、植物。

植物を操れる事や植物の毒を合成する事または、毒を中和する事も出来る。さらに植物のフェロモンを使い、人を操る事も出来る個性である。

「フツ…この国の子供達は美しいわあ…。こういうのを侘び寂びとでも言うのかしら？」

そう言いながら、アイビーは植物を撫でた。

—————

カメラは、ジョーカーのいるスタジオに戻った。

ジョーカーはその映像を見ながら、ポップコーンを食べていた。

「んっ！んん！こりやあ！傑作だ！ヒヒヒッ！街がどどん壊されていくのは笑えるなあ！ヒヤッ！ハハハハ！」

すると、ジョーカーの横に何故かオールマイトが立っていた。

「その通りだね！It's Good news！」

ジョーカーはその声をきくとそのオールマイトのような者を見た。

「おやおや？こんなところに平和の象徴が…！」

そう言うとジョーカーはピストルを抜くと発砲した！

すると、オールマイトのような者はゆっくりと倒れた。

「ウップス！おおつと…！平和の象徴を撃ち殺してしまった！ヒヒヒッ！」

すると、倒れていたオールマイトのようなものはグニョグニョと変化していった。

「んー！いい演技だ！クレイ・フェイス！流石は我が一座の名優だ！」

ジョーカーの言葉にクレイ・フェイスはニコツと笑いながら立ち上がった。ジョーカーは椅子から立ち上がると少し歩き出した。

すると、そこには豚のお面をつけたヴィランが人間を解体していた。

「おうい！ピッグ教授！スシの準備はバッチリかい？」

ジョーカーにピッグ教授と呼ばれたヴィランはジョーカーを見ると言った

「フゴツ！フゴツ！ヒイヒイ！ヒイ！あ…ああ！ばっ…バツチリだとも…！今！こうして解体してるからねえ？」

「そいつア…いい！でも、なるべく早くしろよ？じゃねえと…クロツクが我慢出来ずに人を食いに行くかもしれないねえからなあ？クフフツ！」

ジョーカーはカメラに近づくと強引にカメラを左側に向けた。

そこには、身体中にワニのような鱗がある大男がワニのような大きな口で人の死体を食べていた。

ジョーカーはまた強引にカメラを戻すと言った。

「さあて…？楽しんで頂けたかな？日本の皆様！今回はタダのデモだが…次はもつとすごい事をしてやるぜ…！お楽しみはまだまだこれからだからなあ！ヒヒヒツ！それに日本のヒーロー共！お前らの弱さつたらねえぞお？これでヒーローとは笑わせるな！いいや、構うもんか！俺が笑ってやるぜ！ナハハハハ！ヒヤーツ！ハツハツハハ！次は本当に平和の象徴を殺せるかもな！それと…!!バツツ…！お前もだ！アツ！ハツハツハ！ハツハツハ！」

ジョーカーはカメラを掴みながら笑うとさらに続けて言った。

「それに日本の悪党共オ…！お前達は”平和の象徴” オールマイトに怯えて暮らしているんだろう…！だが、それも今日！これから終わっていく！俺様達…！ヴィラン達が手を振って歩けるようになあ！いいか？おめエラ！よく聞けよ！」

ジョーカーはそう言うと言った胸ポケットから紙切れを出すと言った。

「日本のヴィラン共！オールマイトとバットマンに今から懸賞金をかけようじゃあねえか！一人1000万ドルの賞金首だぜ！ヒヒヒツ！」

カメラをまた掴みジョーカーは顔にグツと寄せた。

「いいか…？バツツ？お前はここの国で死ぬんだ！そんなときやあ…俺が笑ってやるぜ！ヒヤハハハハハハツ！ハツハツハ！」

ジョーカーはそう言うと言ったテレビの映像は消えた…

狂気感染1

ジョーカーの中継は色々な所に放送されていた…。

えっ…どう言うこと？

撮影かー？

ヴィラン？捕まるだろ？

ゴツサムってあの治安の悪い…

繁華街のビルに設置されている画面の映像を見て、人々は困惑の声をあげた。しかし、中にはそれでも無いものもいた。

「おい！見たかよ！さっきのやつ！」

「ああ…！見たぜ！ジョーカーのやつだろ？」

「そうだよ！ゴツサムのヴィランなんかは知らねえが！あのオールマイトに懸賞金をかけやがった！1000万ドルだぞ？」

「ドルを日本円に直すといくらだ？1000倍か？」

「あとバットマンとかいうヒーローもだ！」

「もしかして、あいつら二人を殺せば…2000万ドル!？」

「おい！こりゃあ…面白くなってきたぜ？なあ！」

「ああ！ジョーカーは言ってたぜ！俺達^{ヴィラン}が大手を振って歩ける時代が来るんだ！」

路地裏でヴィラン達はまるでジョーカーのように笑いながら路地裏の奥へと消えていった。

—————
燃え盛る街の中でプロヒーローのバックドラフトは空を飛びながら

火炎放射を浴びせてくるファイヤ・フライに水を浴びせていた。

ファイヤ・フライは水を浴びせられた事に怒りながら叫んだ。

「鬱陶しい事をすんじやあねえよ！このポンプ野郎！」

ファイヤ・フライはそう言うのと燃えてる街の炎を操り始めた。

そして、火炎の竜巻を発生させるとそれをバックドラフトにけしかけた。バックドラフトは慌ててその竜巻から離れようとしたが、既に

遅く竜巻は目の前にまで迫ってきた！

「グアハツハツハ！燃え上がれ！ポンプヒーロー！」

ファイヤ・フライはそう笑っているとバックドラフトの後から一人の男が歩いてきた。その男はその竜巻の前に立つと道路をいじくり、セメントの壁を作った。

「ああ？せつかくヒーローが焼け落ちるのが見れると思ったのによオ！」

「もう…お前の好きにはさせないとも…。お前はここで捕まえる！」

ファイヤ・フライVSセメントス

—————

「あが…！嫌だ！凍りたくない！」

片足を凍らされたヒーローは脚を引き摺りながら逃げていた…。

しかし、氷がガシユツ！ガシユツ！と踏み締められる音とともに冷凍光線が発射された！

「…うわあああ！嫌だ！嫌だあ…！」

ヒーローは叫び声をあげながらも凍っていった。

そのヒーローの横をMr. フリーズは冷凍銃を担ぎながら通り過ぎた。

「全て…凍れ！凍れば何も心配しなくていい…。凍ってしまったえば美しいまま…歳を取らずに若いまままだ！なあ…ノラ…。」

フリーズはそんな事を言ったが何故か寂しそうだっ。

しかし！フリーズの背後で炎が上がる！

フリーズはゆっくりと後ろを見るとそこにはエンデヴァーがいた

！

エンデヴァーはフリーズを睨むと言った。

「街を凍らせたのは貴様か？」

エンデヴァーの言葉にフリーズはゆっくりと冷凍銃を構えた。

「どうやら…そうらしい！」

エンデヴァーはその言葉と共に体から炎を吹きあがらせた！

Mr. フリーズVSエンデヴァー

――
M t. レディは個性で大きかった体を小さくしながら、路地裏に隠れて顔を抱えながら震えていた。

「ごめんなさい」

M t. レディはブツブツとそう言っていると路地裏の入口で物音がした。

「ヒッ！」

M t. レディはその物音に怯えると立ち上がり走り出した。M t. レディの後からは笑い声が聞こえてきた。

「ヒヤハハハハハハッ！何に怯える？ヒーロー女！世の中に見捨てられる事か？それとも助けられなかった人の事か？どれもすべて恐怖！そう！恐怖だ！この俺こそ！^{ファイアー}恐怖だ！」

スケアクロウは笑いながらM t. レディを追った！M t. レディはすっかり怯えながらなりふり構わず逃げていた。

「子猫ちゃん？怯えてるかい？逃げないでこっちおいで！痛くはないから！」

ザズーもM t. レディを追いかけた。

「ハア……ハア……ヒッ！」

M t. レディは路地裏から向こうの通りに出ると、誰かにぶつかり怯えた声をあげた。しかし、ぶつかった人物はゆっくりM t. レディをハグすると言った。

「もう大丈夫だよ！安心して！」

そう言うとその人物はスケアクロウが迫ってきている路地裏に向けて手を向けた。すると！見る見るうちに街を包んでいたガスが吸い込まれていった！

「さあ！毒ガスも吸い込んでやったぞ！出てこい！ヴィラン！逃がさないぞ！」

そう、13号は叫んだ！

スケアクロウ&Mr. ザズーVS13号

アイビーは植物の上に乗りながら、先程から感じる目線にイラついていた。アイビーはあるビルの影を見ると言った。

「ちらちら……ちらを見ないで出てきなさいよ……。坊や！」

アイビーはそう言うのと棘のついた太いつたをそのビルの影に突っ込ませた！すると、その攻撃を避けてアイビーの目の前に一人のヒーローが姿を現せた！そのヒーローはシンリンカムイだった！

「街をこの有様にするとは……まさに悪女……！」

「あら……面白そうな子ね……。それじゃあ……少し遊びましょう？坊や？」

そう言うときアイビーは植物を暴れさせながら向かっていった。

ポイズン・アイビーVSシンリンカムイ

あるテレビ局の前には警察が取り囲んでいた！

「急げ！周りを固めるんだ！」

『了解！』

警官はテレビ局の周りをゆっくりと包囲した。

テレビ局の近くにドラゴンが降りてきた。

ドラゴンは人間姿になると近くの警官に言った。

「それで？状況は？」

ドラグーンヒーロー・リューキュウはテレビ局を見た。

警官は、厳しい顔しながら言った。

「ジョーカー達はあの放送の後……。テレビ局に立て籠もったままだ。

何かを要求するわけでも、何かをする訳でもない。」

「そう……。ほかのヒーロー達は？」

「他の街の被害を少しでも食い止めるのに精一杯だよ。でも、もうすぐでM.S. ジョークとガンヘッドが応援に来る。あと、バットマンもだ」

「そう……。それまでに何かなければいいけどね……！」

リューキュウはテレビ局の玄関を見た！

ゆつくりとテレビ局の自動ドアが開くと、そこには蝶ネクタイをつけ、眼鏡をかけた気の弱そうな男が出てきた。

「動くな！」

警官の一人が銃を構えると男はヒツと声を上げて立ち止まった。

「人質か？保護するからゆつくりと近づいてこい！」

警察がそう指示すると男はゆつくりと警察の方を見た。

警察は、男が何かを持っているのに気づいた！

「おい！お前！何を持っているんだ！こっちへそれを向ける！」

警察はそう叫ぶと男はゆつくりと手に持っているものを向けた。

それは不気味な腹話術師の人形だった。

「なんだ…人形か…！」

警察が安堵の声を上げたその時！

その腹話術人形はまるで生きてる人のように動くミニチュアの機関銃を発砲した！

『うわあああ！』

「…まさか！あの男はヴィランだったの？」

あの腹話術師の名はベントロリクエスト！

個性はパペットマスター！

触れた人形は人間と同じになる。人形の小道具もこの男の個性にかかれれば本物になる。さらに、後から触れた人間を腹話術人形のように操ることが出来る。

「がっはっは！警察のバカどもめ！トロイの木馬のように気づかなかったな？」

腹話術人形のスカーフェイスは葉巻を啜えながらそういった。

「そ…そうですね！Mr. スカーフェイス！」

腹話術師のアーノルドはオドオドしながらそういった。

「おう！お前らもそんな中におらずにもっと遊ぼうじゃねえか！」

スカーフェイスはテレビ局の入口を見ると言った。

すると、その言葉と共にぞろぞろと人間が出てきた。

「なんだ…あれは！」

ぞろぞろと出てきた人達を見ると警察は驚愕の声をあげた！

ある者はまるでミイラのように包帯で顔をぐるぐるにまかれ、ある者は兎の顔が付いたシルクハットを被せられていた。

その人達の中にヴィラン達がいた。

リユーキウウはドラゴンに変化するとヴィラン達を睨んだ。

すると、一人のヴィランが叫んだ！

「ジャバウオックだアアア！」

シルクハットを被り、まるでおとぎ話の世界から飛び出したような服装のヴィランの名前は、マッド・ハッター！

個性は、マッド・ハット！マッドハッターが作り出す帽子をかぶせるとその人物を操ることができる。

「ケッ！なあにがジャバウオックだ！ただの竜じゃねえか！」

両手をバチバチさせながら、リユーキウウを見て悪態をつくヴィランの名は、エレクトロ・キューショナー！

個性は、電撃！最高は100万ボルトまで体に纏える。手に付けている特製グローブは体の電気を貯めて一気にパンチで打ち込む為である。

「フッ…。帽子屋の事はほっとくんだな…エレクトロ？」

黒い骸骨のマスクをかぶり、高級そうな白のストライプ柄のスーツを着込んだ男は両手のピストルと腕に差し込まれた注射管を点検すると、マッドハッターを嘲笑った。

このヴィランの名は、ブラック・マスク。

個性はBlood・Bullet！血液の鉄分をピストルの弾丸に変えることができる個性！水鉄砲の様に改造した物なので弾丸を装填しなくて良い。相手に撃ち込むと体の中から血液を暴れさせれるぞ！因みに弱点はすぐに貧血になる事だ！

「クグクッ！まだコウモリはきてないみたいだな…！」

顔は緑色にぼうつと光っており、その光ってる顔には透けて骨が黒く見えている。体は宇宙服のようなスーツを着こみ、手の部分だけ露出していた。このヴィランは周りを見渡すとそういった。

このヴィランの名前は、ブライド。

個性は、アトミック。手から高熱のエネルギーを発射できる。全身

がエネルギーの塊のようなものであり、体内放射をすれば弾丸など弾き飛ばせる。弱点は鉛

リユーキュウはヴィランの数に冷や汗をかいた…。

「こんなにな…出てくるとは…ね。」

「総員！構えろ！」

『ハッ！』

今にも戦おうとしたその時！ガンヘッドがなんとか間に合い合流してきた。

「済まない…。少し遅れた。」

「構わないわ！それよりも…！」

ガンヘッド達が構えた瞬間、テレビ局に備え付けてあるスピーカーから笑い声が聞こえてきた！

「ヒヒヒヒヒヒ…！ナハハハハハ！ハアア！ハツハツハツハツハ！皆様！ようこそ！お集まりいただきました！それではア…？本日のメインである！殺戮ショーをお楽しみください！あまりに楽しくて逝かねえようにな！ヌワハハハハ！」

そう言うとスピーカーの声は消えた。

その瞬間！ヴィラン達は攻撃を始めた！

—————

暗い室内の中、たくさんの画面がある部屋で男はテレビ局の前の映像を見ていた。

「ハハハハ…。僕の目には狂いがなかったみたいだね…。」

男はジョーカーの映像を見ながらそう言った。男の近くにいた医師はニヤツと笑いながら言った。

「確かに…。あの男のあの演説は見事じゃった…。あれで燻っているヴィラン共を煽る事に成功したからの。」

「そうだよ…。ドクター…あのピエロくんには悪のカリスマ性がある

んだよ。」

「ほう……。カリスマ性……。」

「そう……。僕はあの男のカリスマ性を見て、弔がさらに目指すものとして、あの男と同じカリスマ性を手に入れて欲しいんだよ。僕は」

男は足を組み直すと顎に手を置きながらそう言った。

「あの男と同じもの……狂気をもっと持つてもらわないと困るよ……。僕の後継者としてね。」

暗闇の中でオール・フォー・ワンは笑った

狂気感染2

「私がヴィラン達をなるべく無力化します。ガンヘッド、あなたは支援攻撃を」

「分かった。」

ガンヘッドはヴィラン達に腕を向けて構えた。リューキュウはガンヘッドにそう言うのと警官隊に迫るヴィランに向かっていった。

「ジャバウオックだ！こつちに来るう！ヒイイ！」

迫ってくるリューキュウを見るとマッドハッターはさらに悲鳴をあげた。しかし、リューキュウがマッドハッター達に近づく前に、横から何かがバウンドしながらリューキュウに体当たりしてきた。

「何……！」

リューキュウは少し怯むとそのバウンドしているものを見た。

それは丸々と太った男二人組だった！二人共似た服を着た男達はバウンドするのをやめてリューキュウを見ると言った。

「兄さん！兄さん！あれを見てよ！」

「なんだい？なんだい？弟よ？」

「マッドハッターは恐れてるよ！ジャバウオックに！」

「本当だ！マッドハッターの言う通り！ジャバウオックだ！」

『だったら早く倒さなきゃ！』

男達はリューキュウに向かって来た！

彼らの名はトウイードルダム&トウイードルデー。

個性は弾力と反発である。ゴム毬のように跳ねたりすることができきる。

「マッドハッターには近づかせないよオ？」

「だって！我らがワンダーランド・ギャングのボスだからね！」

そう彼らは言うどリューキュウに襲いかかった！

「……邪魔よ……！失せなさい！」

リューキュウはそう言うど尻尾を振りトウイードルダム達をはじき飛ばした。しかし、彼らを吹き飛ばしてもリューキュウの周りには包帯で顔が見えない者達が群がっていった。

「くっ…！数が多い！」

「リューキュウ！任せろ！」

ガンヘッドはそう叫ぶと手を変化させてリューキュウに群がっていく者達に向けて弾を発射した。しかし、リューキュウに届く前にブライドが間には入り、体内から放射エネルギーを放った。ガンヘッドの発射した弾丸は瞬く間に弾かれた。

「何だと！」

「グガガガ！俺には飛び道具は効かねえぞ？ヒーロー？」

「それなら！」

ガンヘッドはブライドに迫って肉弾戦に持ち込もうとしたが：

ブライドは手をガンヘッドに向けるとエネルギー弾を発射した。

「何！」

「グクグククッ！お前だけじゃないんだぜえ？遠距離攻撃が出来るのは？」

「クソっ！」

ガンヘッド達が苦戦していると包囲している警官隊に

異形な姿の人々が襲いかかっていた！

「クソ！何なんだこいつら！」

「ゴム弾でも怯む様子がないぞ！」

「バリケードを突破させるな！踏ん張れ！」

包帯を巻いた者やシルクハットを被せられた者は不気味に警官隊に迫ってきていた！

「邪魔だア！クソ警察共オ！」

エレクトロキューシヨナーはゴム弾を撃ってきている警官隊に向かって拳を振り上げた！

『ぐああああっ！』

グローブから放たれた電撃が警官隊を襲いかかり、包囲網の一角が吹き飛ばされた！

「フツ！ゴム弾ぶるときで俺達を止めれると思ってるのか？」

ブラック・マスクはそう言うと言った目の前の警察を撃ち抜いた！

「グワハハハ！くたばれえ！」

スカーフェイスは笑いながら短機関銃を撃ちまくった！

「クソ！ヴィランが多すぎる！」

「それにあの不気味な連中もだ！」

「応援はまだなのか!？」

警官達がそう叫んでいると……！

スカーフェイスの短機関銃に何かが刺さった！

「あ……これは……バットラング！って事は！」

ペントロリクエストは周りを見渡し、上を見上げるとバットマンが突っ込んできた！

「ぎゃあー！」

アーノルドとスカーフェイスはバットマンに蹴飛ばされた！

「バットだ！」

ブラックマスクはそう叫ぶと、銃の照準をバットマンに向けた。

「お前達はもう終わりだ！ブラック・マスク！」

「ほう……そりゃ面白い！」

ブラック・マスクは引き金を引くと発砲した。

バットマンは慌てずに動き回りながら弾を避けるとブラック・マスクの懐に迫っていた！

「馬鹿にしゃがんで！」

ブラックマスクはそう叫ぶとさらに引き金を引きまくった！

「ぐっ！」

バットマンに弾が一発命中した！撃たれたところが血が止まらなくなっていた。

それを見てブラックマスクは言った。

「ハハハ……この俺を馬鹿にするからだ！バットマン！お前だけはただでは殺さない！ゆっくりとお前を破滅させてやるのが俺の人生目標だ！」

「それはどうかな？シオニス？」

「何？」

ブラック・マスクはバットマンの言葉にカッときて銃をバットマン

に向けた瞬間、目の前がクラツときた。

「ぐお……まさか！貧血を狙っていたのか……！」

「ああ……お前はプライドが高いからな……。少しバカにすれば食いつく。」

そう言うときバットマンはブラック・マスクを殴り飛ばした！

「ぐああー！」

ブラック・マスクにアッパーが決まると宙を舞った。

バットマンは息つくまもなくエレクトロキューショナーと対峙していた。

「グハハハ！バットマン！日本ヤホンスキーのことわざにある！飛んで火に入る夏の虫とはまるでおめえの事だ！お前は俺が殺す！殺した後に生き返らせてからもう一回殺してやる！」

グローブに電流をためてバチバチとさせながらそう言った。

「お前などに構ってる時間などない」

バットマンはそういうとエレクトロキューショナーに向かって走って行くと、エレクトロキューショナーのパンチをひらりと交わして殴り飛ばした！

「ぐお……ガツ……！」

そのままエレクトロキューショナーは膝から崩れ落ちた。

「早くヴィラン達を拘束せよ！」

「了解！」

警官達は倒れているヴィランを拘束していった

「ありがとう、バットマン！助かった！」

警察官の一人がそう言うときバットマンは言った。

「まだ安心するのは早い……。プライドがまだ残っている。」

バットマンはそう言うときガンヘッド達が居る方へ走っていった！

ガンヘッドはエネルギー弾を飛ばしてくるプライドに苦戦を強いられていた。

「……近づくことも離れて戦う事も出来ないとは！」

「グガツガツガツカ！エネルギーの塊である俺にそんな攻撃が効くわけないだろう？」

「これならどうかしら？」

リューキュウはドラゴンの爪で攻撃したが、ブライドはエネルギーをバリヤーのようにして攻撃を防いだ！

「無駄だア！そんな攻撃は……！」

ブライドがそう叫んだ瞬間！

腕に手錠のようなものが付けられた

「そこまでだ……ブライド」

「ああ……こりやアアア！鉛のオオオ！」

ブライドはそう叫ぶと光り輝く体を点滅させ始めた！

「俺のオオオ！力がアアア！」

苦しそうにブライドは叫んだ！

「お前はもう終わりだ。ブライド」

バットマンはそう言いながら近づくとバットラングを投げつけた。

「グウオツ！」

ブライドはそのまま倒れた。

ガンヘッド達はバットマンを見ると言った。

「助かったわ。バットマン」

「応援に来てくれて助かった。」

しかし、バットマンはすまなそうな顔をすると言った。

「こちらこそ、済まない。私が日本に来たばかりにジョーカー達をこの国に呼び寄せる事になるとは……。」

「いいえ、何もあなたは悪くないわ。悪いのはあのヴィラン達よ。」

そう、リューキュウがフォローを入れていると、テレビ局のスピーカーから声が響いてきた。

「ヒヤアア！H A H A！H A H A H A H A！やあーっと来たか！バツツイー！待ってたぜえ！」

「……ジョーカー！」

「トンガリ耳も来たところだ！このショーも佳境にしようじゃねえか！さあ！お前達！出番だぜえ！」

ジョーカーがスピーカーからそう叫ぶとテレビ局のドアが開いた。リューキュウはドアの所を見て言った

「まさか！また？」

そこにはまた異形な人間達がぞろぞろと現れた

「……あれは！」

バットマンは異形な人達を見ると目の見開いて言った！

「クッフッフ……気づいたか？闇の騎士^{ダークナイト}？」

「そうだよ！その化物^{フリークス}達はドールメーカーとビッグの作り上げた作品だ！このテレビ局の人質を使ってなあ？ヒヤアア！H A H A H A
！H A H A H A H A H A ツー！」

ジョーカーの言葉にリユーキュウ達は顔を青ざめさせると言った

「え……まさか私達が吹き飛ばしたりした人間達って……」

「人質だったのか……！」

警察達も倒れた人達の仮面取ると驚きの声をあげた！

「おい！この人って！」

「ああ！人質にされてたカメラマンだ！」

バットマンは歯ぎしりすると言った

「……お前だけは許さんぞ！ジョーカー！」

「ヒヒヒ……このジョークは中々イカしてるだろう？バットマン？

実に皮肉じゃねえか？ヒーローが人質を痛めつけるなんてなあ！

ンンン……ヌワハハハハハ！」

ジョーカーの笑い声と共に異形な人質達はバットマン達に襲いかかった！

「くっ……人質と分かった今！下手に手を出せん……！」

ガンヘッド達は構えた！すると、空から風きり音が聞こえるとバットマンの前に何かが落ちてきた！それは勢いよく着地すると言った
！

「もう大丈夫だ。何故かって？私が来た!!」

土煙の中からオールマイトが現れた！

「オールマイト！」

「済まないね！少し遅れてしまったよ……！」

オールマイトはそう言うと言いき出し、バットマンの横に並んだ

「オールマイト……。目の前の異形な者達は人質だ！傷つけずに無力化

悪の爪痕

「グワハバハ！そんなのに箆つても無駄だ！それとも手も足も出ねえか？ヒーロー！」

ファイヤーフライは火炎放射をセメントスめがけて発射した
「無駄ではないとも…それに手も足も出ない訳では無いさ！」

セメントスはそう言うのと近くのコンクリートを操って突き上げる様にコンクリートの壁を出現させた！

「うお！飛んでたら食らわねえかと思ったが…それでもねえかあ？グガハバハハ！そんな壁なんか焼き溶かしてやるぜえ！」

ファイヤーフライは笑い声をあげながら空を飛んでいると左腕につけている時計が鳴り始めた！

「んあ…？チツ！もう時間がよ？ヒーロー共を消炭にしてやりたかったのによオ！畜生めえ！不完全燃焼だアアア！」

ファイヤーフライは悪態をつくとセメントスを見て言った
「ヒーロー共オ！お前らを燃やしてやりてえが！時間切れだア！あばよオ！ギャバハハハ！」

ファイヤーフライはそう言うのと背中に炎を集め、飛んでいった！

「逃がしてしまったか…。しかし、これ以上の街への被害を出すわけにはいかないか…。」

セメントスは空を見上げながらそう呟いた

「……………」

「ぬう！」

エンデヴァーは炎で槍を作るとMr. フリーズに向けて投げつけていた。

Mr. フリーズは冷凍銃で氷の厚い壁を作ると防いだ。

「無駄だ…。貴様の炎がどれだけ熱かろうが…私の冷却の個性の前では無力に等しい…」

「ほう…。俺の個性より優れてるのか…ますます試したくなかったぞ！」

エンデヴァーはそう言うのと手に炎を纏うと色を赤色から青色に変

えると厚い氷の壁を破壊した！

「この温度でも貴様の個性は打ち勝てるかな？」

エンデヴアーがそう言つて距離を詰めようとした瞬間！

ファイヤーフライと同じくMr. フリーズの腕時計も鳴り始めた！

「…。」

フリーズは構えてた冷凍銃を下ろすと言つた

「残念ながら時間だ…。お前ともう少し楽しみたかったが…。」

フリーズが言い終わると同時に

空から金切り声を上げながら何かが飛来した！

「キイーツ！キイイイ！」

エンデヴアーは少し後ろに下がりながら目の前に飛来した者を見た。

そいつはまるでコウモリのような姿のヴィランだった。

このヴィランの名はマン・バット

個性はコウモリ！

コウモリと同じことが出来るぞ！口から超音波を出して物を破壊

できる！しかし、日中は目が見えないぞ！

マン・バットはMr. フリーズの肩を脚の爪で掴むと、羽をばたつかせて飛び立とうとしていた！

「逃がさん！」

エンデヴアーはそう叫ぶとまた炎の槍を作り投げようとしたその時！

エンデヴアーは嫌な予感がして避けると、先程自分のいた場所に銃弾が着弾した！

「!!!」

エンデヴアーは慌てて周りのビルを見渡すがどこにも狙撃手はいなかった…。

しかし、エンデヴアー達から5km離れたビルの上でスコープを覗く男の姿がいた！顔をマスクをかぶり片目には赤いスコープを付けていた。

「フフツ…。いい危機察知能力だ…。これ以上関わると次は頭を撃ち抜くぜ？」

男は立ち上がるとライフルを直し始めた

このヴィランの名は、デッド・シヨット！

個性はシヨット！

どんな遠くに離れていても必ず目標を撃ち抜く個性だぞ！

デッドシヨットはどんな銃器でも百発百中の腕を持つ凄腕の殺し屋だ！ただし、唯一無二の弱点は最愛の娘だぞ！

「では、さらばだ。炎のヒーローよ。」

Mr. フリーズはそういうとエンデヴァーに向けてまた冷凍光線を発射した！

「ガァー！」

エンデヴァーは炎で光線を吹き飛ばしたが

煙が晴れた頃にはフリーズ達はいなくなっていた

「むう……。。」

エンデヴァーは煙が晴れた空を黙って睨み続けていた…。

—————

「ヒヤハハハハ！一体どれだけ吸い続けられるかなあ？」

スケアクロウは目の前にいる13号に向けて毒ガスを振りまいていた！

「いくらでも吸い込んでやる！僕のブラックホールでね！」

スケアクロウは13号の追撃をかわしながらザズー共に逃走していた！

「どうするんだ？クレイン？俺のナイフもあと少しだぜ？」

ザズーはナイフを13号に投げつけていたがどんどん吸い込まれていっていた！

「俺もガスが効かないと個性が効かん！あいつは俺にとって天敵だな！」

スケアクロウはそう叫びながら手からガスを発射し続けていたがスケアクロウの達の腕時計も鳴り始めた！

「おい……ビクター！撤収だぞ！」

「そんな事は分かつてるとも……しかし、クレイン？どう逃げるんだ？あの吸引野郎からよ！」

そう、ザズー達は悪態をついていると何処からとも無く

チクタク：チクタクと音がし始めた！

13号はその音に気づくと辺りを見渡した

音を辿って行くところには！顔に大きな時計を被ったヴィランがいた！

このヴィランの名はクロック・キング！

個性はTime is money！お金を食べる事で任意に相手の時間止めれるぞ！しかし、100円で10秒程度だぞ！

「1分28秒も撤収が遅れてるから……心配して来てみれば……。全く……時間は無限ではないというのに……。」

クロック・キングはそう言うと言つて顔の時計に1000円札を近づけると食べた！そして、叫んだ！

「STOP OF THE TIME！」

頭にあるボタンを押すとカメラのフラッシュのように光が出た！

13号はそれを浴びると動きが止まってしまった！

「ヒヤハハハハ！助かったぜ？クロック・キング！」

スケアクロウは笑い声をあげながらそう言った

「笑ってる暇はないぞ？クレイン？この国の金は価値が低い……。止めても1分つてところだ。計画よりも5分遅れている……。さつさと撤収するぞ……。」

「ヒヤハハハハ！そうかよ！じゃあな！ヒーロー！次はお前の顔を恐怖で歪ませてやるぞお？ヒヤハハハハ！」

「口惜しいが……子猫ちゃん？君の為の場所は次まで取っておくからね？次はちゃんと殺してあげるよお……。」

ザズー達はそう言うと言つて路地裏へと消えていった。

—————

「さあ！坊や！もつと私を喜ばせてちょうだい！」

アイビーはそう言いながらシンリンカムイと戦っていた！

「必ず貴女を止めてみせる！」

シンリンカムイはそう言うのとツルをポイズンアイビーに巻き付かせた！その時！アイビーの腕に取り付けられた腕時計が鳴り始めた！

すると、シンリンカムイとアイビーの間に不思議なヴィランが現れた

黄色がかったオレンジ色のストライプ柄のスーツに身を包み、顔にはまるで消しゴム付き鉛筆の上の部分のようなマスクを被ったヴィランだった！

アイビーはそのヴィランを見ると言った。

「あら？イレイサー？迎えに来てくれたの？」

アイビーがそう言うのとイレイサーは頷き、片手に持っていたホワイトボードに何やら書き始め…書き終わると見せた。

〈撤収の時間だぜ？アイビー？遊んでる暇はない。〉(ハ、ハ、ハ)〈

「あら？少しぐらいはいいじゃない？」

イレイサーは呆れるように顔を振るとホワイトボードの文字を頭の消しゴムで消し始めた。そして、また書くと思せた

「へいいや…お前の力を借りたがってる奴らもいるんだ。早くしろ。」

(ハ、ハ、ハ)〈

イレイサーはアイビーを目を細めながら睨みつけた。

「分かったわよ…もう…。」

アイビーはそう愚痴るとシンリンカムイを見ながら言った

「ごめんねえ？坊や？もう少し遊んであげたいんだけど…。そうもいかなくなちやったわ…。じゃあね？」

アイビーは手のひらひらさせると体に巻きついたツルを操り、解いた。アイビーはそのまま植物と共に地下に逃げようとしたが！

シンリンカムイは慌ててまたツルをアイビーに伸ばすと言った

「逃がさない！」

しかし、間にイレイサーが入ると向かってきていたツルを頭の消しゴムで消し去った！

「な！」

イレイサーはシンリンカムイの方を見るとホワイトボードを見せつけた！

〈じゃあの。(´・D´)ノノノ〉

そのままアイビー達は地下へと消えていった！

~~~~~

「んだよ…。こいつあ…」

死柄木はテレビの映像が途切れると怒気を孕んだ声を上げた。

「気に入ったか？小僧？グワーツ！グワグワ！これが俺達だ！」

ペンギンは笑い声をあげると葉巻をふかし始めた

「勝手に暴れられて何が気に入るって？このチビ」

死柄木はゆらりと立ち上がるとペンギンに迫ろうとした

ペンギンは笑いながら手に持っていた傘を向けた！

「…！死柄木弔！落ち着いて！」

黒霧はそう言うのと死柄木とペンギンの間にワープホールを広げた

！

死柄木の片手がペンギンに迫ろうとした瞬間！

先程のテレビから声が聞こえてきた！

「おやおや…。この天才の私と手を組もうとしているのがこんな単細胞な若造とは思わなかったぞ？」

死柄木はその声に後ろを振り返ってテレビを睨みつけると言った

「てめえは誰だ？」

「私か？私は偉大な謎だと思え！小僧！誰にも解けない謎だとな！」

画面に映し出された男は緑色のスーツを着こみ、？マークが特徴的な男だった

このヴィランの名はリドラー！

個性は超頭脳！どんな謎でもすぐさま解いてしまう頭脳があるぞ

！この頭脳を生かして、普段は色々なヴィランの武器開発などをしてる。弱点は実戦向きの個性では無い事だ！

「それで？その謎野郎が…俺をムカつかせるために出てきたのか？」

死柄木はテレビを破壊しようとするリドラーは言った！

「おやおや？ 私とは手を組まなくていいのかね？ 転狐君？」

死柄木は手をピクつとさせると驚愕の表情を浮かべながら言った  
「てめえ……なんで俺の名前を……！」

「君の過去を調べるくらい簡単だ！ ルービックキューブを片手間で完成させるくらいにな！ この天才の私にかかれば、君の殺したがっている平和の象徴とやらを殺す事など簡単だ！」

「……」

「しかし……。ただ殺すだけでは足りないんじゃないか？ この天才の私にも一つ悩みの種があつてね……。それは、あのコウモリ野郎だ！ あいつだけはタダでは殺さん！ じっくりと痛めつけて屈辱的に殺してやる！」

リドラーは声を荒らげながらそう叫ぶと言った。

「おつと……。失礼……。少し感情的になってしまったよ。この私が……。何を言いたいかと言うとだな？ 君と私は似たもの同士という訳だ。どうだ？ この天才の私と手を組めば同じ目標を壊せると思わないか？」  
リドラーの言葉に死柄木は少しぼうつとすると言った。

「……。分かった……。手を組もう」

「死柄木弔！」

黒霧は嬉しそうな声をあげた

「フッフツ！ 君とはウマがあいそうだ！」

リドラーはそう笑い声をあげると映像を切った！

~~~~~

この事件は後にテレビ局事件と言われるようになる。この事件が後にヴィラン連合の起こす大事件の始まりだとは誰も気づかなかった

~~~~~

「……」

緑谷出久は神妙な面持ちで電車のニュースを見ていた

(ゴツサムシテイのヴィラン！ジョーカーの非常な犯行！テレビ局爆破並びに街への無差別テロ行為！)

(ヴィラン連合と結託か？裏社会の勢力図が書き変わる？)

(犯罪件数減少…。まるで嵐の前の静けさ)

写真とともにその文字が流れていた。それを見た出久は考えていた。

ヘセメントスやあのエンデヴァーもヴィランを捕まえに行つたのに…逃げられるなんて…

また電車に揺られながら画面を見ていた。そこにはアナウンサーが崩壊した街のレポートをしていた。

(三谷町は現在も凍結しており！現在も通行が出来ないでいます！)

隣の金田町も火は鎮火したものの…未だに燻っている状態です！)

へオールマイト…悔しいだろうな…

出久はそう思いながら電車に揺られていった…。

出久は雄英高校の前に着くと啞然とした…。

何故なら、たくさんのマスコミが雄英高校の取り囲んでいたからだ

「ええええ！何これえ！」

出久は驚きの声をあげると後から声をかけられた

「緑谷ちゃん…こっちよ」

「蛙吹さん！これはいったい…？」

「ゲロ…オールマイトの事もあるみたいだけど…。あのテレビ局事件のバットマンについてインタビューしたいみたいよ」

「バットマン…。」

緑谷はバットマンについて思い出していた。

戦闘訓練の後、相澤先生が臨時講師が来るといふ事を言った

その臨時講師がバットマンだったのだ。

「この裏口から入るのよ…。緑谷ちゃん」

蛙吹は雄英高校の裏口の扉を指さすと歩き出した！

「ありがとう！蛙吹さん！」

出久は蛙吹と共に雄英高校に入って行った！

1-Aクラスに入るとクラスはテレビ局事件の話題で持ち切りだった

「デクくん！あのテレビ局の放送見た？」

麗日は教室に入ってきた出久見ると駆け寄ってきた

「わわ！リアルタイムでは見てないけど…！見たよ！」

「おっ！緑谷じゃん！おは〜！」

上鳴は出久を見るとそう言った。

「あのヴィラン気持ち悪かったよねえ…。それに…」

麗日は暗い表情を浮かべながらそう言った。

「あのヴィランって、ジョーカーって言うらしいぜ！すげえヤバい奴らしい…」

切島達はそう言うのとタブレットの画面を出久達に見せてきた

そこには、こちらを見て狂氣的に笑うジョーカーの写真だった。

「ハッ！そんな奴！俺がぶっ殺してやんよ！」

爆豪はジョーカーの写真を見ながら悪態をついた

そうこうしているとチャイムが鳴り始めた

「諸君！私語を慎み、きちつと着席したまえ！」

飯田がそう言うとお出久達は席に座り始めた。

チャイムが鳴り終わると

「私が！教室に来たあ！！」

オールマイトが入ってきた！

オールマイトが入ってきた事で歓声があがった！

「やったぜ！オールマイトだ！」

「どんな授業してくれるんだろ？」

「楽しみですわ」

オールマイトは教壇に立つと言った

「授業を始める前に！少し！僕の友人を紹介しよう！入ってきてくれ！」

オールマイトはそう言うのと扉の方に目を向けた。  
扉が開くとそこにはバットマンが立っていた。

「1-Aクラスのメンバーは驚きの声をあげた！」

「おいおい……。あれって」

「今日からだったのかよ……」

「はい！ざわざわしない！紹介しよう！僕の友人！バットマンだ！はい！自己紹介！」

「臨時講師をする事になった。バットマンだ。ヨロシク」

バットマンはそう言った

## 水中の殺し屋

「よろしく…。」

僕らの前で挨拶をしたバットマンは頭をゆっくり下げた。

僕らはそんな様子にびっくりしながら固まってる。オールマイトは言った。

「皆！何を固まってしまってるんだい？せっかくバットマンが臨時講師として来てくれたんだから！何か質問してみないかい？」

オールマイトの言葉に少しバットマンはギョツとした表情を浮かべながらオールマイトを見た。すると、勢いよく飯田君は立ち上がると言った！

「ハイ！質問をしてもいいでしょうか！」

「はい！飯田少年！」

「バットマン先生はどんな理由でヒーローを目指そうとしたんですか？」

飯田君の言葉にオールマイトは少し気まずそうな表情を浮かべると、バットマンを見た。バットマンは少し寂しそうな目をしながら言った。

「私がヒーローを目指そうとした理由か…。私は…小さい頃に両親を街の悪党に殺されてね…。それで…私はあの街を変えたくてヒーローになったんだ。」

バットマンの言葉に教室はシーンと静まり返り、気まづい雰囲気が出た。飯田君は申し訳なさそうな表情を浮かべると言った。

「…!!!。すみません！こんな質問をしてみました！」

「構わない。君が私の正義に疑問を持つのは分かる。私がこの国ではヴィランと同じとなるヴィランだからだろうか？」

バットマンはそう言うとき少し微笑むとまた言った。

「確かに私は最初の頃は…ヴィランだった。誰にも認められなかったが…あの街をどうにか平和にしたい一心でね？しかし、私は歪んだ正義で悪党を捕まえたくはなかった。それはただのヴィランだからね。だから、三つの制約を自分に設けた…。」

1つ目は決して悪党を殺さない。

2つ目は私怨で動かない。

3つ目は悪党を必ず警察に引き渡すという事だ。」  
バットマンはそう言うと言った。

「私の正義は悪党共に恐れられる存在になり、彼らへの抑止力となる事だ。君への答えはこれでいいかな？」

「はい！ありがとうございます！」

飯田君はお辞儀をするとそう言った。

オールマイトはその様子を見ると言った。

「はい！他にはいないかい？」

「あの…いいでしょうか？」

「はい！八百万少女！」

「先生に質問なのですが…何処かでお会いになりましたでしょうか？私の勘違いなら良いのですが…。何処かでお聞きしたお声なので…」

八百万さんは申し訳なそうにそう言った。

バットマンはじいっと八百万さんを見ると言った。

「八百万財閥の…。いいや…残念ながら私は君と会ったことは無いな…」

バットマンは少し何かをぼそつと呟くと首を横に振りながらそう言った。

「そう…ですか。質問にお答え頂きありがとうございます。」

八百万さんは腑に落ちなような顔をしながら、お辞儀をすると席に座った。

「はい！他にはいないかい？」

「はいはい！」

「はい！芦戸少女！」

芦戸さんは元気よく手を挙げて言った。

「先生のそのマスクの下の顔はどんな顔をしてるんですか？イケメンですか!？」

バットマンは芦戸さんの言葉に少し固まると言った。



「済まない……このマスクを外す事は出来ないんだ。そうだな……。この私が言うのもなんだが……ひどい顔はしていないよ。」

「あ……ありがとうございます……。」

バットマンはそう言い終わると芦戸さんに向かって笑いかけた。

芦戸さんは少し顔を赤くするとお辞儀をして席に座り込んだ。

「はい！他にはいないかい？」

またオールマイトそう言うのと僕らを見た。

僕は少し疑問に思ってた事を質問してみる事にした。

「はい……！」

「はい！緑谷少年！」

「質問なんですが！ジョーカーというヴィランは何者なんですか？」

僕の質問の内容に教室はまた静まり返った。

しかし、かつちゃんは僕の方を振り向くと言った！

「ああ？何だよ！クソナード！怖いのかよ？怖いならヒーローになんかなるなよな？」

かつちゃんがそう言い終わると同時にバットマンは言った。

「いい質問だ。緑谷君……奴はゴツサムヴィランの中で一番謎で危険なヴィランだ。経歴も個性も不明だ。」

だが、奴は沢山のヒーロー達を再起不能に追い込んできた。奴ほど人の壊し方について詳しい奴はいない。

それに奴は人心掌握の天才だ。今回のテレビ局事件はこの国のヴィランの心をわしづかむのに丁度よかっただろう。私やオールマイトの懸賞金についてもね……。

奴は次は何をするのかは誰にも予想出来ん……。奴以外にもゴツサムヴィランがこの国に来ているが……一番危険なのはジョーカーだ。ジョーカーが何かする前に私は奴を止めるつもりだ！」

バットマンはそう言い終わるとさらに続けて言った。

「君達に一つ忠告しておく。ジョーカーもしかしりだが……ゴツサムのヴィラン達はこの国のヴィランとは訳が違う。奴らは戦いに慣れている。」

だから、奴らを見たら絶対に立ち向かつてはダメだ！

奴らを倒せると思ってるのなら、考え直した方がいいぞ…？  
奴らを見たら立ち向かわず逃げる事だ。」

バットマンは教室の皆を見ながら、そう言うとかつちゃんを見つめながらそう言った。

「しかし、心配しないで欲しい！私が必ずや奴らを全員捕まえる。

それまで、私はこの国を離れないと決めた…！」

バットマンはそう力強くそう言った。

-----

三模湾―沖合30メートル―

一隻の不審な船が港に近づこうとしていた…

「ボスから連絡あったか？」

覆面をかぶったヴィランは横にいる仲間に声をかけた。

「ペンギンからか？いいや？ねえな？」

「へっ！そうかよ…。わざわざゴツサムからこんな積荷を運んでるのによオ…。あの黒いモヤの奴に運んでもらえばよかつたのによオ…。」

ヴィランは船の上にある大きなコンテナを見た。

そこには嚴重に鎖で巻かれ、所々に何かがあたつたかのように凹んでいた。

「お前…こんな噂知ってるか？」

「あ？噂？」

「ああ…ボスから聞かされてる積荷はドラッグと武器だつて話だが…

本当は化物が積荷らしい。」

「化物？」

「ゴツサムで積荷を載せる時よオ…。ジョニーの奴が見ちまつたらしい…。あのコンテナの中に白い肌の化物が寝てるのを…。」

「へっ！ジョニーの奴！酔っ払って幻覚でも見たんだろ？」

覆面男は嘲笑すると歩き始めた。

腹面男が船の手すりに近づいた時…！海の向こうから何かがあつてよく何かが迫ってきているのが見えた！覆面男は叫んだ！

「何かが来るぞ！」

「バットマンか!？」

「絶対に船には近づかせな！」

「あいつを海の藻屑にしてやれ！」

腕を銃に変える個性のヴィランが向かってくる何かに向かって発砲を始めた！遠距離攻撃のできる個性ではない者達もアサルトライフルや船に備え付けてある機関銃を乱射した！

「死にやがれえええ！」

ヴィラン達がそう叫んだ瞬間！キインツと音がしたと思うと

ヴィラン達の体に異変が起きた！

「な…何だ!?これりやあ?」

「体が…動かねえ！」

「畜生！ピクリともうごかせ…！」

ヴィラン達もがいていると船に迫ってきたものは、水の中から勢いよく飛び出すと船に乗り込んできた！

それはギヤングオルカと海難ヒーローのセルキーだった。

ギヤングオルカの後には黒づくめのサイドキック達がいた。

「不審船がいると来てみれば…どうやら本当だったみたいだな？」

「ああ…！最近は何やら物騒だから、念の為にあんたに応援を読んでよかつたよ！ギヤングオルカ！」

セルキーはそう言うのと固まってるヴィラン達に近づいた。

「おい…テメーら！何をこの国に運び込もうとしやがった！誰の指示だ？言え！」

セルキーは一人にそう言ったが、ヴィランはニヤツと笑いながら言った。

「そんな事…！言えるかよ！アザラシ野郎！ギヒヒ！」

ギヤングオルカのサイドキック達は倒れてるヴィラン達を捕まえていった。ギヤングオルカはコンテナの横に書いてある絵柄を見ると言った。

「ペンギン…！ゴツサムのヴィランか！」

忌々しそうに顔を顰めた瞬間！

一羽の鴉がギャングオルカの目の前に現れた！

「む？」

鴉は少しギャングオルカを見ると、羽ばたきギャングオルカに突進をした！

「…！」

ギャングオルカは避けると飛んでいった鴉を睨んだ。

すると、サイドキック達が叫んだ！

「シャチョー！すごい数の鳥が！」

ギャングオルカは空を見ると、空にはたくさん鳥が空を舞っていた！すると、その鳥達の中から声が響いた！

「グワッ！グワッ！グワッ！グワッ！ちゃんと運んでいるかと見に来てみれば！何だこの有様は！」

その声は怒気を孕んでおり、その声を聞いた下っ端ヴィラン達は怯え始めた！

「も…申し訳ありません！Mr. コブルポット！」

「黙れ！言い訳は聞きたくない！役立たず共！せつかく密輸入したブツでピエロや2つ顔より優位になろうとしたのによ！」

鳥達の中からこうもり傘で、ふわふわと滑空しながらペンギンが現れた！ペンギンは着地するとギャングオルカ立ちを見下ろしながら言った！

「この積荷を運ぶのを邪魔しやがって！この積荷は俺様の戦力になるものなんだぞ！だが…まあいい！あのコウモリ野郎が来る前に頂いていくとしよう！」

ペンギンがそう叫ぶとギャングオルカ達は身構えた！

しかし、ペンギンはそんな様子を見ると言った！

「ガッ！グワッ！グワッ！グワッ！グワッ！この俺様がお前ら全員と戦うと思ってるのか？残念だが…俺たちの中にもお前らみたいな水に強い奴はいるんだぜ？」

ペンギンがそう言うと、どこからとも無く時計の音がし始めた！

「何だ？この音は？海から聞こえ…」

セルキーがそういつた瞬間！

海からギャングオルカ達のいる所に何かが飛び出してきた！

「ガアアアアア！」

それはまるでワニのような姿をしたヴィランだった！

このヴィランの名はキラール・クロック！

個性はクロコダイル！

ワニができることはほとんど出来るぞ！

人を食べる事が好きなカニバリズムの癖がある殺人鬼だ！

クロックはギャングオルカに飛びかかると大きな口で噛み付こうとした！ギャングオルカは慌てて避けると手をヒレに変えてクロックをはじき飛ばした！

クロックは積荷のコンテナにぶち当たったがすぐに立ち上がると言った。

「魚クセエ……！ダガ……美味ソウナ匂イダ！」

「あの一撃でも怯まんか……！これは手強いな！」

「ギャングオルカ！加勢するぜ！」

セルキーはギャングオルカに近づこうとした瞬間！

また海から何かが飛び出してきた！

それはセルキーの近くに着地すると船を大きく揺らした！

「クロックの野郎！先に行きやがって！俺がシャチと戦いたかったのによオ……！」

サメの顔をした巨体のヴィランは、大きな体を震わせながら水を落とすとそう言った。

このヴィランの名はキング・シャーク！

個性はホオジロザメ！

ホオジロザメができることは何でもできるぞ！

自分の自慢ポイントは虫歯にならない歯だぞ！

「何だあ……このでけえやつは！」

セルキーはそう叫ぶとシャークを見た！

シャークはセルキーを見下ろしながら言った。

「あん？何だ？アザラシかあ？俺の大好物じゃねえか！頂きまあす

！」

キング・シャークは口を大きく開けると、セルキーを食べようとした！セルキーはそれを避けたがキング・シャークはセルキーのいた所を口で破壊した！

「ムグムグ…！チツ！ちゃんと口に入らないとダメだろう？お前は俺の捕食対象大好物なんだからよお♡」

キング・シャークは悪い笑みを浮かべると大きな口を開けてまたセルキーに迫った！

「ぐっ！誰が捕食対象だ！誰が！」

セルキーは身構えるとキング・シャークをカウンターで殴ったが、一向に効いた様子は無かった。

一方、ギャングオルカはキラール・クロツクの攻撃を避けていた！

「死の大回転  
デス・ロール!!」

クロツクは口を開けたまま体を捻り回転をかけると、ギャングオルカに迫った！

「ふん！そんな一方向にしかいかん攻撃避けやすいわ！」

ギャングオルカはクロツクの攻撃を避けたが、クロツクはそのまま床に突っ込むと船に大きな穴を開けた！

「ヨケラレチマツタカ…！ダガ…！」

クロツクは突進をすると、またもやサラリと交わされたが…

ギャングオルカとのすれ違いざまにニヤツと笑った！

その突進先にはサイドキックが一人いた！

ギャングオルカはそれに気づくと！慌ててクロツクにくらわせた！

「超音波アタック！」

ギャングオルカが食らわせた瞬間！ギャングオルカの頭にクロツクの尻尾が勢いよく叩きつけられた！

「グアッ！」

「シャチョー！」

「グアハハハ！俺ノ武器ハ爪ヤ牙ダケジャネエゾ！尻尾モレッツキトシタ！武器ナンダ！」

ギヤングオルカは尻尾での攻撃にフラフラになってしまった！

しかし、超音波アタックはクロックにも効いたようで動けなくなっていた！

「クソツタレめ！クロック！何やられてんだ！」

ペンギンは悪態をつきながらそう言うときング・シャークを見ると言った！

「キング・シャーク！何遊んでやがる！畜生めえ！もういい！」

ペンギンはそう言うとき傘をギヤングオルカ達に向けて言った！

「鳥共！積荷を運び出せ！」

ペンギンがそう叫ぶと空を飛んでいた鳥たちがコンテナに集まり始めた！鳥達はコンテナについている鎖を足で掴むとコンテナを浮きあげた！

「グワーツ！グワツグワツグワ！頂いていくぜ？ヒーロー共！」

コンテナが浮き上がったのを見ると、ペンギンはニヤリと笑いギヤングオルカ達を見た。

「ま…まて！」

ギヤングオルカは弱々しくそう言ったがペンギンを止められそうになかった。

ペンギンは傘の先をギヤングオルカ達に向けながら言った！

「キング・シャーク！クロックを背負ってずらかるぞ！欲しいものは手に入れた！」

「ペンギン！まだ俺は大好物を食べてねえぞ！」

「いいじゃねえか！大好物は最後に残しとくもんだぜ？」

ペンギンの言葉にあまり納得した様子はなかったが、キング・シャークはセルキーを見ると言った。

「つてな訳だ…。口惜しいがここまでだ！だけど…次は必ずお前を食べてやるぜ？アザラシちゃん？」

キング・シャークはそう言うときクロックが倒れている所まで走った！

「待ちやがれ！」

「邪魔だ！雑魚ども！」

『ギャーっ！』

クロツクの周りにいたサイドキック達を蹴散らすとキング・シャークはクロツクを担ぎ上げた！

「あばよー！ヒーロー共！」

ペンギンは傘の先から煙玉を発射すると傘を回転させてヘリコプターのように飛び上がった！

キング・シャークも海に飛び込み、姿を消した！

セルキーはその様子を見て叫んだ！

「クソォー！」



## USJ 襲撃事件前 (Side ヴイラン)

ヴィラン連合の隠れ家で死柄木とジョーカーは顔を合わせていた。

「ヒヒヒヒヒ！お前がMr. 死柄木か？いい目をしてるぜ！それにその顔を覆ってる手はいいジョークだ！ヒヤー！H A H A H A H A H A！」

ジョーカーは死柄木を見るとそう言った。ジョーカーの反応に死柄木はムカつきながら言った。

「てめえ…バカにしてるのか？今すぐにでも殺してやろうか？」

手をジョーカーに向けながらそう言った。その様子に慌てて黒霧は言った。

「落ち着いて下さい！死柄木弔！バットマンを倒すには彼との協力が何よりも必要なですよ！」

「黙れ！黒霧い…！父さんを馬鹿にされて黙ってられるかよオ…！」

「ヒヒヒヒヒ！若いつてのはいいねえ！殺る気に満ち溢れてやがるなあ！」

黒霧に止められている死柄木を見て、ジョーカーは笑っていた。

そんな様子にペンギンはジョーカーに言った。

「おい！いい加減にしねえか！クラウン！こいつは俺らと同盟を組む奴だ！こいつをおちよくるんなら、今ここでお前を殺してやろうか？」

ペンギンはジョーカーに傘を向けながらそう言った。ジョーカーはその様子に笑いながらこう言った。

「ヒヒヒヒヒ！ただのジョークさ！オズワルド！俺は人見知りだからなあ？少しでも和やかなムードにするにはジョークの1つや2ついるもんだ！」

ジョーカーはそう言って笑うと死柄木を見て言った。

「さっきのジョークが気に入らないんなら謝るぜ！Mr. 死柄木！ヒヒヒヒヒ！」

ジョーカーはお辞儀を深々とするとそう言った。

黒霧は死柄木をなだめながらこう言った。

「では、我々の目的を明確にしましょうか。私達の目的はオールマイトの抹殺、そしてあなた達はバットマンを殺す事……。それでいいですね?」

黒霧の言葉にジョーカー達は頷きながら答えた。ペンギンは黒霧を見ながらこういった。

「少しいいか?」

「何でしょう?」

「あの平和オールマイトの象徴とやらだ! あいつの個性の威力が尋常では無いのはあのテレビ局のガラスを吹き飛ばしたのを見たのでわかった! 俺もアレを見て、アイツへの対策はゴツサムから連れてきた! お前らもそんな対策をしているのか?」

ペンギンの言葉に黒霧はこう言った。

「オールマイトへの対策ですか……。そうですねえ……お見せいたしましょう……。」

黒霧は黒いモヤになるとモヤの中から脳無が出てきた。

「なんだ? こいつは?」

トゥーフエイスは脳無を見ながらそう言った。黒霧は脳無を見ながらこう言った。

「彼は対オールマイト用の改造人間。オールマイトの一撃にも耐えれて個性を複数を持つ”改人”です。」

「ありえん……。そんな事をするとは……。」

「……複数の個性だと? そんな事が可能なのか?」

黒霧の言葉にトゥーフエイスは絶句した表情で脳無を見た。ペンギンは目をキラキラさせながらそう言った。ジョーカーは脳無を見ながらこう言った。

「ヒヒヒヒヒ……これがお前らの切り札ってどこか! これをドールメーカーやピッグの奴に見せたらアイツら喜びまくるだろうなあ? HAHHAHAHA!」

「ドールメーカーとは?」

ジョーカーの言葉に黒霧は反応した。ジョーカーはその様子に笑いながらこう言った。

「俺様が襲ったテレビ局の連中を化物に変えた奴らさ！ヒヒヒヒヒ！  
アイツらならもつとコイツを化物に出来るぜ？ヒヤーツ！A H A  
H A H A H A！」

「ほう…。それは…」

ジョーカーの言葉に黒霧は少し考えこんだ。ジョーカーは脳無を見ながらまたこう言った。

「それにしたつて！コレがお前らの対オールマイトの策か！なら、俺様の対平和の象徴を見せてやるぜ！」

ジョーカーの言葉に黒霧はハツとしてこう言った。

「対オールマイト…？」

「おうい！入ってこいよ！ヒヒヒヒヒ！」

ジョーカーの言葉に入口のドアがガチャつと開いた。

入口から入ってきたのは何かのタンクを担いだプロレスラーのよ  
うな男だった。男はジョーカーにこう言った。

「俺を待たせるとはいい度胸だな？ピエロ野郎…？」

「ヒヒヒヒヒ！そう言うなよ！ベイン！少し会議が白熱していたから  
さ！サプライズは一番最後の方がいいだろう？」

このヴィランの名はベイン！

個性はジャンキー・マッスル！

薬物を体に入れると体がムキムキなるぞ！特にベイン専用が開発  
された違法薬物を体に入れると尋常ではない力が手に入る！バット  
マンを一度再起不能にした事があるぞ！

「クソツタレが！」

ベインはそう言うとジョーカー達の前にタンクを置いた。

黒霧はこれを見ると言った。

「これは？」

「ん？ただの身体能力活性剤さ！ヴェノムつて言うんだぜ？ベイン！  
見せてやってくれ！」

ベインは手についたダイアルを回した。すると、みるみるうちにベ  
インの体が大きくなっていった。天井にベインの頭がつくかつかな  
いかの所で大きくなるのが止まった。

「ガアアア！」

ベインは雄叫びをあげながら黒霧達を見た。黒霧はベインを見上げながら言った。

「この薬品は…どれくらいあるんです？」

「これか？タンクローリーぐらいはあるぜ？ヒヒヒヒヒ！」

「少し分けては貰えませんか？」

「ああ！構わんぜ？何しろ…俺らは仲間だもんなあ？ヒヒヒヒヒ！」

ベインは脳無を掴むと持ち上げた。

「おい！何をする気だ！おい！ピエロ！あの筋肉野郎を止めろ！」

死柄木はそう言ったがベインはもがく脳無の頭を握り潰して、背骨をボキボキに折ると叫んだ。

「こんな弱つちいのでオールマイトってのは倒せるのか？安心しろ…オールマイトって奴は俺が殺してやる。そして、懸賞金も俺のモノだ！グワハハハハハ！」

ゴリラの様に胸を叩きながらベインはそう言った。黒霧は目の前でピクピクして倒れてる脳無を見ながらこう言った。

「まだまだ…改良の余地はありますね…。」

「すまねえな！ヒヒヒヒヒ！あいつは脳筋だからよ！」

ジョーカーはおどけながらそう言った。少し時間が経つと脳無は復活した。

「…!!回復の個性か！」

その様子にペンギンは驚きの声をあげていた。黒霧は少し間を起きながらこう言った。

「さて、話を戻しましょう。今日から二日後にオールマイトが教鞭を持っている雄英高校である授業があります。」

黒霧はテーブルに雄英高校のカリキュラムを置いた。

「その授業は校舎から離れた所で行われるのでこの時を狙います。」  
「ほう…。ファイヤーフライを邪魔したヒーローも先生なのか…。」

トゥーフエイスをカリキュラムを見ながらそう言った。

「成程な！他のヒーロー共が少ない時にオールマイトだけを狙うのか！グワーツ！グワツグワツグワツ！」

「その通りです。しかし、この雄英高校に侵入するには高度な防犯設備をどうにかするしかありません。」

「流石はヒーローを夢見るガキの通う学校だな…。」

トウーフフェイスはそう言いながらコイントスをした。

「そこで私の出番だろう?。」

急に声が響いた!ペンギン達はギョツとしながら辺りを見渡した。

ジョーカーはその様子を笑いながら壁に備え付けられた画面を見て言った。

「ヒヒヒヒヒ!おやあ?エディ君じゃねえか!俺らの会話を盗み聞きかい?。」

「煩いぞ!ピエロ!この天才の私にかかれば他人の会話を盗み聞きするなど簡単な事だ!。」

「…。Mr. リドラー…本当に雄英バリアを取り除けるのですか?。」

黒霧は画面に映るリドラーにそう言った。リドラーはこう言った。

「ふん!あんな防犯設備なんぞ。天才の私にかかれば簡単な事だ!。」

クロスワードを解くぐらにな!どうせなら、今スグにでもあの学校のコンピュータを乗っ取てやろうか?。」

「それは結構ですとも。しかし、雄英バリアを取り除いてくれるのは有難いです。」

黒霧はそう言うとペンギン達を見た。

「雄英高校襲撃作戦は以上です。他に何か?。」

「これならよオ…?二つのチームに分けるか?オールマイト抹殺チームとバットマンを足止めするチームだ。」

ペンギンの言葉に黒霧はうなづいた。それを見てジョーカーは言った!

「これで決まったな!ヒヒヒヒヒ!バツツがどう動くかが楽しみだぜ! H A H A H A H A H A H A!。」

ジョーカーは笑っていたが壁にあった時計を見ると言った。

「ウツプス!おやおや…もうショーの時間だぜ!人気者は辛いなあ?ヒヒヒヒヒ!。」

ジョーカーの言葉に黒霧はモヤを発生させたジョーカー達はその

モヤに消え行つた。

ある暗い地下の地下…。

そこにはたくさんヴィラン達が集まっていた。

「ジョーカー！ジョーカー！」

「ペンギン！ペンギン！」

ヴィラン達は思い思いに声を張り上げながら、ジョーカー達を待った。

すると、黒いモヤと共に死柄木とジョーカー達が現れた！ジョーカーはヴィラン達を見て、笑い声をあげながら言った。

「Hello！日本のファンの皆さん！！クフツ！俺様の放送を見てくれたみたいだな！俺様のショーは楽しんでくれたか？ヒヒヒッ！」

ジョーカーがそう言うと、ヴィラン達から歓声が上がった。

ペンギンはその光景を笑いながら口にくわえた葉巻を吸いながら言った。

「ガハハハ！こんなにも集まるとはな！おい！例のモノを出せ！」

ペンギンは黒霧のモヤの方見て、そう言うとモヤからクロックがコンテナを担いで現れた。

「おっと！オズワルドおじさんがいい子のお前らにプレゼントがあるそうだ！どんなプレゼントだろうなあ？ヌハハハハ！」

ジョーカーはペンギンを見ながらそう言った。

「全員に配るわけじゃねえぞ？クラウン！俺様は強いヤツにしか興味がねえ！弱いかもしれん奴に武器を配れると思ってるのか？」

ペンギンはジョーカーを睨みながらそう言った。

トウフフェイスはコイントスをしながら苦々しい表情でそれを見ていた。ジョーカーはそれに気づくと言った。

「おやあ？ハービー？火傷顔をしかめてどうしたんだ？ああ！そうかア！お前はまだ何もしていなかったもんなあ？デント検事様は一体これから何をするのかなあ？ヒヒヒヒ！」

ジョーカーは挑発するようにトウフフェイスに言った。

トウフフェイスはその言葉にコイントスをやめると銃を取り出しジョーカーに向けて言った。

「よほど死にたいらしいな？ピエロ？このコインでお前の運命を占つてやろうかア？」

トウーフフェイスとジョーカーの間に険悪な雰囲気の流れたが…

トウーフフェイス達の間にペンギンの傘が割って入ると言った。

「おい！ジェントルマン共！俺達は戦争をしにこの国にわざわざ呼び出されたんじゃないやねえだろが！この同盟関係もこの国から出たら終わりだが俺達には共通の目標があるだろ？」

「おお！そうだったな！ペンギー？すっかり忘れちゃってたよ！ヒヒヒヒヒ！ヒャー！H A H A H A H A H A!!」

ジョーカーは高笑いしながらそう言った。

すると、ヴィラン達から怒号が聞こえてきた

「おい！いつまで続ける気だ？さっさと用件を話せよ！」

ジョーカーは笑うのをピタツと止めるとその愚痴を言ったヴィランを見た。

トウーフフェイスはその男を睨みながら、コイントスをするコインは宙を舞って手の甲に落ちた。ゆっくりと手を開けるとコインの柄を見た…。その瞬間！躊躇なくピストルを抜くとその男に向かって発砲した！しかし、男は笑って言った！

「ああ？ピストルで俺を殺そうってのか？無駄だ！俺の個性は頑…え…？」

男がそう言い終わる前に弾丸が男の頭を撃ち抜いた！

周りのヴィランはざわついた。

「残念だったな？コインはお前が有罪だと言っている…。」

トウーフフェイスの個性はコイントス！

相手にコイントスをする事で裏が出れば、個性が2時間の間使用不能になる。表が出れば何も無い。自分に使用すると表だと、身体能力がUpする。裏だと自分も同じく個性が使用不能になる。

「さて…？他には文句のある奴はいねえか？いるんだったら…前に出てくるといいぞお？ヒヒヒヒッ！ただし？出た瞬間！顔にスマイルをかかべる事になるかな？ヒャーッ！H A H A H A H A H A！」  
ジョーカーは狂気じみた笑い声をあげるとそう言った。





## USJ 襲撃事件前 (Sideヒーロー)

バットマンの言葉を聞いたその日の放課後…

僕が家に帰ろうとすると廊下の影から、オールマイトに声をかけられた。

「緑谷少年…!!」

「うわっ！オールマイト?」

「ちよつと…一緒に来てくれるかい?」

「わ…分かりました…!」

僕は慌ててオールマイトのあとを追うと、グランドの隅にある使われていない倉庫に着いた。

「オールマイト?何でここに?」

「君に紹介しておかないといけない人物がここにいるからさ!」

オールマイトと僕は一緒に倉庫の中に入ると、どこからとも無く声が聞こえてきた。

「オールマイト…!一人で来てくれと頼んだはずだが…?」

「H A H A H A H A H A ツ!君にもこの子を紹介しておかないといけないからね!」

「ハア…仕方ない…。」

声の主がため息をついた瞬間、倉庫の床が沈み始めた!

「えっ!えっ!何で…!」

「H A H A H A H A!安心したまえ!緑谷少年!死にはしないさ!」

オールマイトは怯える僕の肩をガシツと掴みながらそう言った。  
沈みこんだ床がある深さで止まると真っ暗だった前が開いた!

そこには、秘密の空間が広がっていた!

「うわあああ!なにこれエエエエ!」

僕がそこに広がっていた風景を見て叫び声を、あげるとオールマイトは言った!

「オールマイト!何ですかこれ!」

「H A H A H A H A H A H A!ようこそ!緑谷少年!バットケイブへ!」

「へっ？バットケイブウウウ!?」

僕は叫び声をあげながら周りを見渡した！秘密の空間の中には色々な機械などが動いていた。僕達が降りてきたリフトの正面奥には大きな画面があり、そこにはバットマンが何かを調べていた。バットマンは手を止めると後ろを振り返って言った。

「オールライト…。君…守秘義務って知っているか？」

「H A H A H A！ああ！知ってるとも！しかし、この子だけには教えておきたくてね！」

オールライトはそう言うのとトウルーホームになった。

「えっえっ！オールライト！ここでその姿になっちゃあー！」

「ガブツ！バットマン…！紹介するよ…僕の後継者だ。」

オールライトは僕の言葉を気にせずにバットマンにそう言った。

「ほう…！緑谷君が！」

バットマンはオールライトの言葉に少しびっくりしながら僕に近づいた。

「ど…どうも」

「君も重いものを背負ってしまったか…。」

バットマンはしみじみと何かに浸りになりながら僕を見てそう言った。バットマンはオールライトを見ながらこういった。

「君が雄英高校の教師になると聞いてから、何かあるとは思っていたが…活動するのが難しくなったか？オールライト？」

「確かに…もう私は全盛期ほどの力は無い…。だから、私はこの力を未来にバトンタッチしようと思ったのさ！」

「そうか…。」

オールライトの言葉にバットマンは寂しそうに呟くと、椅子に座り直した。

「緑谷君を私の隠れ家に、君が連れてきたのはそれが理由か…。オールライト…。緑谷君…」

「は…はい！」

「この事は誰にも教えてもらわないで欲しい。ここを知っているのは校長とオールライトだけだからね？この事は他言無用に願うよ

…。」

「はい！分かってます！」

バットマンの言葉に僕は元気よくなづいた！僕の様子を見てバットマンは満足そうにうなづいた。オールマイトは目の前の画面に注目するとバットマンに言った。

「これは何が映っているんだい？バットマン？」

オールマイトの言葉にバットマンは画面を見ながら、キーボードを触り始めた。

「ここ数日の犯罪件数と街の監視カメラに映ったヴィラン達の様子だ。犯罪件数が減っている割には…ヴィラン達の動きが活発になりすぎだ」

「つまり…ヴィランが何かを企んでいると？」

「その通りだ…オールマイト。何もゴッサムから来ているのはジョーカーだけでは無いのは、アーカムとの連絡で調べがついている。それに昨日の日本近海に現れたペンギンの密輸船についてもだ。奴らはこの国で、何か大きな事をするつもりだ。」

「密輸船までも…。」

オールマイトはバットマンの言葉に目を丸くしていた。

バットマンは監視カメラの映像を見ながらこう言った。

「オールマイト…緑谷君。気をつけた方がいいかもしれん。何か嫌な予感がする。」

バットマンの言葉にオールマイトは頷きながらこう言った。

「肝に銘じておくよ…。邪魔したね？バットマン」

「あ…ありがとうございます！」

オールマイトが帰ろうとしたので僕も帰ろうとしたその時！

「緑谷君…！」

バットマンに声をかけられた。

「は…はい！」

「たまにこのバットケイブに来るといい。来たら授業以外での特別トレーニングをつけてあげよう…。」

バットマンは僕にそう言ってくれた。僕は嬉しくなりながらこう

言った。

「ありがとうございます！また来ます！」

僕はバットマンにそう言ってお辞儀をするとリフトで待つてるオールマイトに向かって走って行った。

—————

リフトがウイーンっと音を立てながら、上に上がっていくのを見送るとバットマンはコンピューターにまた向かい合った。

バットマンは通信ボタンを押すと、画面には執事のアルフレッドが映し出された。

「アルフレッド…こっちのコンピューターの設備が整った。何とか通信を始められる。」

「それはようございました…ブルース様。何かなさいますか？」

「ロビンに繋いでくれ」

「かしこまりました…」

アルフレッドはそう言うのと通信をロビンに繋いだ。

「やあ！バットマン！日本への旅行はどう？」

「タイム：旅行している状態では無いのは知っているだろう？」

「ハハ…冗談だよ。それで調子は？」

「良くないな…最悪と言ってもいい。せつかく捕まえたブラックマスク達もウエザーウイザードに奪還された。」

バットマンは顔しかめてそう言うのとロビンは怪訝そうな顔をして言った。

「ウエザーウイザード？あのローグスの？」

「ああ…そうだ。あのローグスのだ…。」

「それはおかしいよ！あいつらは、光速ヒーローのフラッシュにしか興味が無いんじゃないの？」

「それだ…タイム。ジョーカー達以外のヴィランにもおかしい所がある…。フリーズは何故…ノラが居るはずのないこの国来たんだ？彼はノラと一緒にいるはずなのにだ。」

「それは明らかにおかしいね…。」

「タイム…ゴツサムの様子はどうか？」

バットマンの言葉にロビンは肩をすぼめながらこう言った。

「ジョーカー達がいなくなつて静かなもんだよ…。手下のヴィラン達も散発的に強盗とかするぐらいで大人しいし…。主要なリーダー格もいなくなると全然だね。今もナイトウィング達とパトロール中だよ」

「そうか…。」

ため息をついたバットマンに心配そうにロビンは言った。

「大丈夫？ブルース？」

「ロビン…濟まないが日本に来てくれ。ジョーカー達が何かを企んでいる…どうやら、面倒な事がおきそうなんだ…。」

「…!!。だいぶ…まずい状況みたいだね。アンタが僕に助けを求めろなんて。」

「頼んだぞ…。」

「ちよ…!」

バットマンはロビンとの通話を切断すると、また違うところに通話を始めた。

「フラツシユ…久しぶりだな？」

「久しぶりだね！ブルース！どう？日本旅行は？NINJAいた？」

画面の向こうでは光速ヒーローのフラツシユがにこやかに笑っていた。バットマンはため息をつくと言った。

「日本での旅行と洒落込みたかつたんだが…。フラツシユ…日本にウエザーウィザードがいる…。何か知らないか？」

「え…？何だつて!?ウエザーウィザードがいる？」

「ああ…そうだ。何か…」

「ちよつ…ちよつと待つて！詳しい奴連れてくる！」

「詳しいやつ？」

フラツシユは慌てた様子で画面からフレームアウトすると、フラツシユは光速でどこかに行った。しかし、すぐに戻ってきた。

戻ってきたフラツシユの両腕には、二人の男が手錠を付けられてギヤーギヤーと騒いでた。

「離せ！フラツシユ！ウエザーとブーメランの奴がいなくなったんだ

「お前と相手してる暇ねえんだよ！」

右腕に抱えられている防寒具の様なものを着たヴィランはフラツシユを見ながら、悪態をついていた。

「お前との相手よりもあいつらを探さねえと！トリックスターは今病院だしよオ！それにウエザーやブーメランだけじゃねえ！トツプやパイドパイパーもいねえんだ！」

左腕に抱えられている防火服の様なものを着たヴィランは防寒具のヴィランの言葉に付け加えていた。フラツシユは二人を見ながらこういった。

「C・コールドとヒートウェーブだよ！バットマン！こいつらなら何か知ってるかも？」

フラツシユは画面いっばいにコールドとヒートウェーブの顔を近づけた。

「あ？バットマン？ゴツサムのコウモリ野郎か！何の用だ！」

コールドは目の前に映し出されているバットマンに向かって悪態をついた。

「…。お前のチームであるローグスのメンバーの1人。ウエザーウィザードが今に日本にいる。何故だ？」

コールドはバットマンの言葉に固まった。暫くしてコールドは喋り始めた。

「何だと？ウエザーがJAPANに居るだと？ふざけるのも大概にしる！このコウモリが！」

信じられないと言いたげな表情を浮かべながらコールドはそう言った。

「これを見てもまだ信じられないか？」

バットマンはキーボードのあるボタンを押すと、画面にオールマイト達を妨害しながら、捕縛されたヴィランを連れ去るウエザーウィザードの姿が映し出された。

「おいおい…。何でウエザーがそこにいるんだ？」

ヒートウェーブは画面の映像を見ながら、啞然の声を上げた。更に、コールドはポカンと口を開けたまま固まってしまった。その様子

に見かねたフラッシュはコールド達に言った。

「どうやら、ウエザーだけじゃなくて他にも行方不明な奴がいるみたいだけど？どうかしたの？」

フラッシュの言葉にヒートウェーブがポツリと呟いた。

「誰かに拉致られたんだよ…。ウエザーもブーメランもトップの奴も…。」

コールドもヒートウェーブの呟きに呼応するかの様に言った。

「俺達はその場にはいなかったんだが…。」

トリックスターから聞いた話によると、黒いモヤがウエザー達の前に出てきて、ウエザー達を取り込んだらしい…。トリックスターはその黒いモヤに抵抗してビルから落ちちまって…全治4ヶ月の重症を負ってしまった。」

「だ…そうだよ。バットマン」

「ふむ…何者かがウエザーウィザードを連れ去ったのか…。」

バットマンはそう言うときまたキーボードで何かを打ち込み始めた。

そして、フラッシュに言った。

「済まないがフラッシュ…もつと他にも何かわかったことがあった連絡をくれ…頼む。」

「ちよ…ちよつと…」

またバットマンは通話を切ると真つ暗になった画面を見つめながら、思索した。

(他の悪党共を攫ってまで…この国で何をする気だ…？ジョーカー…)

バットマンは考え込んでいった。

通話を切られた向こうの人達の様子

「切っちゃまった！たつくー！あのコミュ障め！もう少し前に言ってくればいいのに！困ってるから来てくれぐらい言えるだろ！」

タイムはそう言いながら、ビルとビルの間を飛んでいった。

「あーあ…切っちゃった。それにしても大変そうだなあ…バットマン

…。」

フラッシュはため息をつくと脇に抱えたコールド達が出た。

「おい！フラッシュ！ウエザーは本当に日本にいるんだろな！」

「さっきの映像を見た限りだと日本にいるみたいだねえ…。」

フラッシュはしみじみとそう言うのとヒートウェーブは言った…。

「なあ…フラッシュ。バットマン大変そうだったよなあ？助けてやらねえのか？」

「…そうだ！お前らジャステイス・リーグとか言うチームメイトだろ？助けてやったら喜ぶぜ？」

コールドもヒートウェーブの言葉に乗っかって言った。コールド達の言葉にフラッシュは少し固まるとコールド達を見てニヤツと笑った。

—————

次の日…。

出久達がクラスの学級委員長を決めている頃…。

校長は校長机に座りながら書類を書いていた。

「フムフム…これはいい考えだね！」

根津校長が目の前にある書類を見てそう言うと、近くにあつたパソコンの様子がおかしいのに気づいた。

「ん…？また不正アクセス者かなあ？ここのコンピューターに入らせはしないよオ！ハハハハ！」

根津校長は悪い笑み浮かべながら、不正アクセスをしている者をブロックしようとキーボードを触った瞬間！

画面に大量のハテナマークが映し出されると、そこに緑色の帽子を被ったヴィランの顔が現れた！

「おやおや…この私と頭脳戦を繰り広げるのはこんな小動物か！」

全く…恐れ入ったよ！ヒーローを育てる学校だから少しは骨のある奴かと思えば…まさかネズミにコンピューターの守護者をさせてるとは…！」

「…!!。君はリドラーだね！」



根津は画面に映ったヴィランを睨むとそう言った。

「ご名答！動物の癖によく私の事が分かったな！」

リドラーは満足そうに頷くと言った。

「このコンピューターは幾分か時代遅れの物を使っている様だ：天才の私にかかれば、こんなコンピューターなど簡単に侵入ができる。」  
リドラーは自己陶醉に浸りながら、そう言った。根津はリドラーを睨みながらキーボードを打ち込み始めたが：リドラーに止められた。  
「やめたまえ！無駄な事だ：この私が逆探知されるほど、バカだと思っているのか？毎度毎度：あのコウモリには逆探知で苦渋を舐めさせられてるからな！今回は私の電波を逆探知しても、分からなくしてあるとも！」

リドラーは笑いながら続けてこう言った。

「嘘だと思ふのなら、逆探知をしても構わんが？」

根津はギリツと歯軋りをした画面を睨みつけながら言った。

「それで？君はお話をする為に来たのかい？」

「話ではない！警告と忠告をしに来てやったのだ！あのコウモリに伝えろ！近々、私の至高にして最大のリドルが出来上がる！今度こそ、お前の息の根を止めるとな！これが警告だ。あとは：そう！忠告だ！」

リドラーは懐中時計を取り出して時間を見て言った。

「3、2、1。」

リドラーのカウントがゼロになった瞬間！警報が鳴り響いた！

「な…！何が起ったのさ！」

根津は慌てて近くにあつた携帯でプレゼントマイクに連絡を取った！

「何があつたのさ！」

（根津校長！どうやら！記者の連中が雄英高校の中に入ったみたいです！）

「中に？雄英バリアは何故…？まさか！」

根津は電話を切らずに画面から、こちらをみてニヤニヤするリドラーを睨んだ。

「この私にかかれば、この学校の警備システムを停止させる事など！  
お茶の子さいさいだ！いいか？これは忠告だ！私はこの学校のコンピューターをハッキング出来るぞ？ハッキングされたくないから、もう少しマシなコンピューターを入れる事だ！ハハハハ！」  
リドラーは笑いながらそう言い残すと画面から消えた。



「行くぞお？オマエら！ヒーロー共の時代に息の根を止めるんだ！  
おっと！お前らの息の根も止められないように気をつけるよ？  
ヒヤー！A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A！」

ジョーカーはそう高笑いするとヴィラン達と共にモヤへと消えて  
いった。

――――

ある繁華街の上空に紫色のヘリコプターが現れた！

「え？何あれー？」

「宣伝か？」

「事故であつたのかなあ？」

歩行者達が足を止めてそう言っていると

すると！ヘリコプターから空中に映像が投写された！

それは、椅子に座ってこちらを笑うジョーカーの映像だった。

「Hee!oo!ファンの皆さん！ジョーカーおじさんだよオ？ヒヤー  
！A H A H A H A H A H A！」

ジョーカーが映し出されたことに歩行者達はパニックになつた！

「うわあああ！ジョーカーだ！」

「マジかよー！」

「何か起きるぞおー！」

パニックになり始めた歩行者達を尻目にジョーカーは続けた。

「この前のデモンストレーションは覚えていてくれるかい？あれは  
傑作だったよなあ？ヒヒヒ…！だがあ…？あれは前にも言った通り  
デモだ。だからよオ…今日は最高にイカれた1日してやるぜ！H A  
H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A！」

ゲラゲラとジョーカーが笑うと街の各地で異変が起こり始めた！

――――

金有市銀行

金有銀行の入口で警備しているヒーローは目の前の道路に現れた  
黒いモヤを警戒していた！

「何だあれは！嫌な…予感がする！応援を呼ばないと！」

ヒーローが応援を呼ぼうとしたその時！黒いモヤの中から光が見えたと思うと、半分を白と黒に塗装したトラックが飛び出してきた！「突っ込む気か!!しかし、ここはどうさんぞ!」

ヒーローが立ち塞がったが……!

運転席にいたトゥーフフェイスはコイントスをするところと言った

「えらく勇気のあるやつだ……。だが……それは蛮勇だ。

よって……有罪だ」  
ギルティ

トゥーフフェイスはアクセルを更に踏み込むと車は更に速度を上げた。

ヒーローは個性を発現しようとしたが……!発現できなかった!

「あ……あれ?個性が……!」

ヒーローはそれだけを言い残すと、トラックに跳ねられて地面に叩きつけられた。ヒーローを跳ねるとトラックは銀行の入口に突っ込んだ!

トラックは銀行内に止まると、トゥーフフェイスはトミーガンを構えながら降りてきた。

すると、こう言いながらトミーガンを天井に向けて発砲した!

「皆さん……。落ち着いて……私達は古いタイプのピストル強盗です……。金目のモノを今からバックを持たせた手下を回らせますので……そちらに大人しく入れてくれたら何もしないと、ここに誓いましょう!しかアー……?抵抗する者はあ……!真っ二つに引き裂いてやる!さあ!野郎共!奪い取れ!」

トラックの荷台の扉が開くと白と黒のマスクを被った手下達が降りていき始めた!

「ヒヤハー!」

「金庫の扉を開けろ!」

「金目のモノは俺に渡せ!早く入れろ!」

手下達がそう言っていると外からサイレン音が聞こえ始めた!

「やべー!サツだ!」

「誰だ!通報しやがったのは!」

手下達が騒ぎ始めるとトゥーフフェイスはトミーガンをまた天井に

向けて発砲した！

「誰が通報したのかはどうでもいいだろ？お前らは手を休めるんじゃないねえ……！外の客は俺らが対処してやる……。いいな？」

『イエス！ボス！』

トウーフフェイスは言い残すと銀行の入口に向かった。外には警察が銀行を包囲していた。警察官の一人がメガホンを持って言った。

「ここは完全に包囲された！もう逃げ場無いぞ！大人しく投降しろ！」

トウーフフェイスは黙ってそれを聞くとこう言った。

「おい……！お前ら！出番だ……。」

トラックの荷台がまた開くとそこには4人のヴィランが現れた。

左からブラックマスク……スカーフェイス……ブライド……イレイサーの4人だった！

「痛てて……！おい……この2つ野郎！なんであんなに荒い運転しやがんだ！危うく俺の腕が外れそうになつたじゃねえか！」

スカーフェイスはトウーフフェイスに抗議しながらミニチュア機関銃を組み立て始めた！スカーフェイスを横目にブラックマスクも賛同した。

「その通りだ……！もう少し優しく運転しやがれ！ハーヴィー！」

「グゴガガガ！俺は気にしねえがな？」

（痛かったぞー！（／・ω・）／この野郎！）

ブライドは笑っていたが……イレイサーも抗議しながら暴れる準備を始めた。

「ガタガタ言うんじゃないやねえ！今ここで……！個性不能にされたくないから暴れるんだなあ？」

トウーフフェイスはそう脅しをかけると、スカーフェイス達は渋々動き始めた！

「いつか覚えてろよ！ハーヴィー……この事は貸しだからな！」

スカーフェイスはそう悪態をつくると目の前にいる警察に向かっていった！

「くたばれえ！警察共お！」<sup>ホリ公</sup>

パトカーに向かって軽機関銃を乱射し始めると、それに続いてブライド達も暴れ始めた！

「そんなのでガードしたつもりか？それじゃ俺の個性は止めれんぞお？グゴガガガ！」

手から出るエネルギーでパトカーを破壊しながらブライドは笑い声をあげた！ブラック・マスクも警官に弾を撃ち込むと、その警官を操り周りの警官に攻撃させた！

「か…身体が…！勝手に！」

イレイサーが前に進むと警官たちが囲んだ！

「大人しくしろ！」

イレイサーは警官を睨むと頭の消しゴムで警官を襲った！

このヴィランはイレイサー！

個性は鉛筆付き消しゴム！

頭にある消しゴムはどんなものでも消す事が出来るぞ！しかし、1日

2 m以上消すと偏頭痛に悩まされるぞ！両手を合わせると鉛筆になり、書き加えたり、地面で書く事で簡単なものなら具現化できるぞ！

「うわあああ！俺の下半身が消えかかって！」

(うおりやアアアア！ビュツ(。ヅ)っー■■)

イレイサーは地面にハンマーを書くと、それでパトカーを粉碎した

！

「クソっ！応援はまだか！」

「応援はもうすぐだ！それまで持ちこたえろ！」

「ウワハハハ…。」

パトカーの影でしゃがむ警官達に高笑いが聞こえ始めた！

「な！何だ！」

包围している警官隊の後から不思議なヴィランが現れた！

白い礼服と白のシルクハットをかぶった紳士風のヴィランなのだ  
が…顔がないのである！否！顔はあっても透明なのだ！

このヴィランの名前はジェントルマン・ゴースト！  
個性は亡霊！

何でもすり抜けるぞ！攻撃されても効かないぞ！しかし、ある光や塩を当てられると攻撃を食らうぞ！

「ウワハハハ！」

ジェントルマンは警官の銃撃をもともせず、片手に構えたレイピアで警官を刺殺した。

「何…何だ…このヴィラン共は！」

警官がパトカーの後ろに隠れながらそう言っている…何か羽ばたくような音が聞こえた。その音のする方を見ると、背中から蛾のような羽を生やしたヴィランがいた。

「ううう…。オレ…あんまり暴れるの得意じゃねえんだけど…。」

その男は怯えながらそう言った。警官はそのヴィランに銃を向けるとこう言った。

「抵抗するな！投降しろ！」

「ヒッ！」

ヴィランは背中に担いでいた銃を警官に向けると発射した！

警官はまるでガのまゆみたいにされた！

このヴィランの名前はキラ・モス！

個性はモス！

蛾のように空を飛ぶと毒鱗粉をまき散らすぞ！武器はコクーン・ガンと呼ばれる相手を無力化する特殊な武器だ！弱点は光に集まりやすい事と弱い事だぞ！

「オレ…あんまり驚かされるとやつちやうんだよね…。へへへ…。」

キラ・モスが照れながらそう言った瞬間！キラ・モスの服が体を拘束をし始めた！

「な…な…なんだア！」

キラ・モスはそのまま墜落すると、ヒーローのベストジーニストがサイドキックを連れて現れた！

「それまでだ！悪党共！一流である私に大人しく投降したまえ！」  
「ベストジーニストだ！」



「助かったぞ！」

トウーフフェイスはベストジーニストを見ると笑いながら言った。

「ククク……お前ら……とうとうヒーローの登場だ！可愛がつてやれ！」

トウーフフェイスはそう言いながら、コイントスをしたが……コイントスの結果に驚いた。

「表だど？まだあいつは有罪ではないのか……？」

ベストジーニストにブライド達は迫った！

「グゴガガガ！七三ヒーロー！俺を倒してみな！」

「そう言われなくても！」

「グオツッ！」

ブライドも服が体を拘束し始めた！スカーフフェイス達も襲いかかったが！無力化された！

「あとはお前だけだ！トウーフフェイス！」

ベストジーニストはそう言ったがトウーフフェイスは笑っていた！

「おいおい……？なんで勝った気になっていやがる？まだまだ始まったばかりだぜ？それに……ヴィランは何もそいつらだけじゃねえぞ？」

「何？」

ベストジーニストがそういった瞬間！目の前に何かが突き刺さった！

「クソっ！」

ベストジーニストは慌てて離れようとしたが……突き刺さったそれは爆発した！爆煙の中から一人のヴィランが現れた！

茶色のコートを着て、下は青いコスチュームを着込んでおり、両手にはブーメランが握られていた。

「何だよ。何やられてんだよオ。せつかく銀行強盗やるって聞いたたによオ？話が違うじゃねえか？ええ？」

このヴィランの名前は、Cーブーメラン！

個性はブーメラン！

投げた物は必ず手元に帰ってくるか、狙ったものに必ず命中させることの出来る個性！ブーメランは爆発するものから色々あるぞ！好

きな物はヌイグルミだ！

「クソっ！新手か！お前達！大丈夫か？」

ベストジーニストは後ろにいるサイドキック達を見ると…  
サイドキック達は泣いていた…。

「どうしたんだ！」

「わ…分かりません！何だか…！涙が！なみだがああ！」

泣いているサイドキックの近くに黒いスーツとマント着て、黒いシルクハットをかぶったヴィランが泣いていた。

「悲しいねえ…悲しいねえ…ウオオウ！」

このヴィランはウィーパー！

個性はRain<sup>泣</sup>cry<sup>雨</sup>！

ステッキから発生させる雨雲の雨に当たると悲しくなっ泣いてしまっぞ！しかし、自分も泣いてしまっのが弱点だ！

「彼らから離れろ！」

ベストジーニストはウィーパーを倒そうと個性を使おうとしたが、しかし、個性が使えなくなっっていた！

次の瞬間！ベストジーニストの背中に激痛が走った！

「グウ…！」

ベストジーニストは吐血しながら、ゆっくりと後ろを見ると…そこには！ナイフをベストジーニストに刺しているザズーの姿があっった。

「ま…まだ…いたのか…！」

「お前の魂もその体から解放してあげるよ…！ゆっくりと…ね？」

ザズーは狂気的な笑みを浮かべた。更に！ベストジーニストの体に銃弾が撃ち込まれた！銃声の先には手のひらでコインを受け止めながら、こちらを見て笑うトゥーフフェイスがいた。

「残念だっったな…？小僧？お前の幸運もこれまでだっったな？

残念ながら…有罪<sup>ギルティ</sup>だ。」

ベストジーニストは倒れ込むと何とかザズーから離れようとしたが…

「さあ！さあ！もつと俺に君の命の輝きを見してくれ！」

ザズーはキラキラとした目で足掻くベストジーニストを見ていた

が…！ザズーに何かが当たった！

「ギャツ！」

ザズーが突き飛ばされると、そこにはバットマンが立っていた！

「そこまでだ…！悪党共…！」

—————

こうして…バットマンいや、雄英の長い一日が始まったのだった。

## 狂宴Ⅰ

雄英高校の校門にはマスコミ達が集まっていた…。

「今起きているヴィラン騒ぎをどう思いますかー！」

「バットマンにインタビューさせて下さーい！」

「オールマイトにかけられてる懸賞金と何か関係あるんですかー？」

マスコミ達がそう閉まった門の前で騒いでいると、1人のアナウンサーはふと後ろを振り向いた。そこには黒いモヤが徐々に現れ始めていた。

「え？何…あれ？」

アナウンサーがそう言うと、黒いモヤから帽子を被らされた人間達が現れた。その人間達の中にいたマッドハッターは紅茶をすすりながらこう言った。

「アーリースウウウ？意地悪しないから出ておいで！楽しいティーパーティーが始まるよ！」

帽子を被った人間達はマスコミを襲い始めていった！

トウーフフェイスはバットマンを見ながら笑うと言った。

「ようやく来たか…！バットマン！待ってたぞ！」

「お前の企みはもう終わりだ！デント！」

トウーフフェイスは拳銃をを向けながらコイントスをすると言った。

「いいや…。終わりではない…。運命コインはそう言っている！」

トウーフフェイスはそう言うとバットマンに向かって発砲し始めた！

しかし、バットマンはそれをものともせず突進していった！

「馬鹿め！自ら蜂の巣になり来るとはな！死ね！バットマン！」

トウーフフェイスは笑いながらそう言った。バットマンは腰からバットラングを取り出すとトウーフフェイスにめがけて投げた！

「ウオッ！」

バットラングは回転しながらトウーフフェイスの手にあった銃を叩き落した！

「ぐううう…。クソツタレ！」

トゥーフフェイスはバットラングの当たった手を痛そうに抑えながらバットマンを見た。バットマンはトゥーフフェイスに向かってさらに突進しながらこういった。

「諦める！デント！」

「諦めるだど？ハハッ！馬鹿め！俺は二丁拳銃使いだ！」

トゥーフフェイスは懐から違う色の拳銃を取り出すとバットマンに向けた！しかし、バットマンは既にトゥーフフェイスの目の前に迫っていた！

「何！」

トゥーフフェイスが少し怯んだ瞬間！バットマンはトゥーフフェイスを殴り飛ばした！

「グガアアアアアア！」

トゥーフフェイスは慌てて手から、離れた銃をつかもうともがいたがバットマンにその手を踏みつけられた！

「ギャアアアアア！」

「企みは終わりだ！デント！」

「ぐうう…。フフフ…。」

手を踏みつられて顔を歪めていたトゥーフフェイスだったが…バットマンの言葉に笑い始めた。

「何がおかしい…。？デント！」

「フフフ…。まんまと罠にハマったな！ダークナイトオ！この俺が何故…。この国まで来て銀行を襲ったのか？分からないのか？」

「何？」

バットマンがそう言った瞬間！バットマンを強い光が襲った！

「STOP the TIME！」

バットマンは慌てて避けると光がトゥーフフェイスに当たりトゥーフフェイスは固まった。

「お前か…。クロックキング！」

「ふむ…。計画が12分11秒も遅れている…。早く決着を付けないと…。」

クロックキングは腕時計で時間を確認しながら、片手に持った札束を顔に押し当てた！

「さあ？バットマン…。君の時間は…<sup>TIME</sup>あとどれ位あるのかな？」  
クロックキングは顔の時計をさらに輝かせた！

雄英高校の校門前ではプレゼントマイクとセメントスがマッドハッター達を倒していた。

「Y E H A A A A A A A!!」

プレゼントマイクの声の風圧で帽子をかぶった人達が吹き飛ばされたりしたが、すぐにムクリと起き上がってきた。

「また起き上がりやがった！これ以上加減してはできねえぞ！」

プレゼントマイクがそう叫んだ。セメントスは地面を触り操られた人々を少しづつ捕まえながらこう言った。

「しかし、彼らは操られている民間人です。下手にこちらから手を出すこと出来ません！」

「アリス？何処？何処かなあ？あの学校の中かなあ？」

早く出てくださいよオ！『マッド テーパー テーパー！』」

マッドハッターはプレゼントマイク達を見ながらそう言った。

「あいつが民間人を操ってる親玉かよオ！なんて！c r a z y F a c eなんだ！」

プレゼントマイクがそう叫んでいるとまた黒いモヤが現れた。その中からおもちゃの戦車や飛行機が出てきた。

「なんだありやあ？」

プレゼントマイクがそう叫ぶと戦車や飛行機はプレゼントマイクに向かって何かを発射した。

「…!!。危ない！」

セメントスは慌ててセメントを操り、プレゼントマイクの前に壁を作ってそれを受け止めた。その瞬間！大爆発を起こした！

「うおっ！何だよ！玩具の戦車の弾が本物の威力みたくなつたぞ！」

玩具の戦車はキャタピラの音をたてながら、プレゼントマイク達に迫っていった。さらに黒いモヤからキャラクターの被り物をかぶっ

たヴィランが現れた！

「僕の玩具で遊ぼうよ！まあ…血塗れになるかもしれないけどね！」

このヴィランの名前はトイマン！

個性はBAD TOYS

トイマンが触れた玩具は実際のものと同じ威力になったりするぞ！

更には自由自在に操れる！普段はヴィラン相手に武器を作っているぞ！

「いっけー！飛行機隊の爆撃ー！」

トイマンがそういうと空中で旋回していた玩具の飛行機が、プレゼントマイク達に向かって飛んでいった。

「クソツタレ！Y E A A A A A A A A H！」

プレゼントマイクはヴォイスで飛行機を破壊したが、トイマンはまだまだ玩具を出してきていた。

「楽しいなあ！もつともつと！遊んでよ！」

トイマンは被り物の頭をゆらゆらと揺らしながらそういうのだった。

—————

「おお…！流石はエニグマだ。 雄英高校の監視カメラをハッキングしおった。」

暗闇の中で老医師は沢山並んでいるテレビ画面を見ながらそう言った。

「ハハハ…。彼は戦闘向きの個性ではないがこういうのは向いているからね…。」

オール・フォー・ワンは車椅子に座りながらテレビ画面を見つめた。

そこには、雑魚ヴィランやトゥーフエイズ達が暴れる銀行やマッドハッターと戦うプレゼントマイク達の映像の映っていた。

「お気に召して貰って何よりですか？Mr.ワン？」

テレビ画面の1つにはエニグマの顔が浮かび上がった

「ああ…有難う。リドラー君…お陰様で僕の後継者が雄英に入りやす

くなつたよ。」

「お安い御用ですとも！Mr. ワン…。この私をアーカムから出してくれた御礼だ！」

「いやいや…。謙遜は良くないよ。リドラー君…。君は天才なんだろう？これくらいは朝飯前じゃないのかね？」

「…ツツ!!いいでしょう！もつと素晴らしいものを御覧にいれようではありませんか！」

リドラーはそう声を荒らげるとキーボードに何かを打ち込むと…

画面に映っている雄英高校の映像に大きなロボットが現れた！

「おお…。あれは雄英高校が持つておる仮想ヴィランロボットではないか…！あれでさえもハッキングしおつたのか…！」

オール・フォー・ワンの横で老医師は興奮した様にそう言った。

オール・フォー・ワンは頬杖をつきながら画面を見ながらこういった。

「ハハハ…。彼はナルシズムがあるからおだてやすいね…。」

やはり君の言う通りだったね？プロフェッサー教授？」

オール・フォー・ワンがそう言うのと、後ろの暗闇から白衣のガタイのいい男が現れた。

その男はスキンヘッドにあごひげを蓄え、丸メガネをかけていた。

男はオール・フォー・ワンの横に立つとこう言った。

「ええ…。ニグマ君は極度のナルシストであり、自己顕示欲の塊の様な人物だ…。だから、彼をほかの連中と競わせるのは得策なのだ。」

男はそう言いながら画面を見つめた。オール・フォー・ワンは少しニヤリと笑いながらこう言った。

「流石はストレンジ教授…見事な心理分析だね」

それを聞くとストレンジは冷めた目でオール・フォー・ワンを見るのだった。

このヴィランの名前はヒューゴ・ストレンジ教授！

個性はマインド洗コントロール脳！

10秒間：相手の頭に手を当てて命令したりすると相手を操れるぞ！



しかし、戦闘向きの個性ではないのが弱点だが！

作戦を考えたりするのが得意だぞ！

「君をこの国に招待したのはバットマン・キラーとしてもそうだが…あの狂人共を手懐けるには骨が折れるから猛獣使いの様な人材が必要だったしね…。それに君の参謀としての頭が必要だったのさ…。」

オール・フォー・ワンはストレンジを見ずにそう言った。ストレンジは息を大きく吐くと言った。

「私がバットマンに執着するよりも、貴方がオールマイトに対する憎悪の方が凄そうだ…。」

「もちろんだとも…僕をこの体にしたアイツを許せるわけが無い。

アイツにはもつともつと…苦しんで死んでもらわなきゃね」

オール・フォー・ワンは暗闇の中で怪しく笑うのだった。

――――  
また 繁華街に紫色のヘリコプターが現れると、ジョーカーが映し出された。ジョーカーは何処かのスタジオで寿司を食べながらカメラ目線でこう言った。

「うーん！これは…ファンターステイク！なんて美味しいんだあ！やはりJAPANの寿司は最高だな！ヒヒヒ…！ゴッサムじゃあ…生の魚なんて食べねえからなあ？ジョーカー！フィッシュがいるくらいだ！ヒヒヒ…！あんな所の魚を生で食っちゃうと体から鱗が生えるぜ！ヒャー！AHHHHHHAA！」

ジョーカーはそう言うと言いつつ寿司を咀嚼しながら、湯呑みのお茶を飲み干した。ジョーカーはカメラ目線のままこう言った。

「こんな美味しい寿司に会えて俺は嬉しいぜ！こんな時は確か…！そうだ！作ってくれた奴に礼を言うのがこの国の礼儀だよなあ？クフフフフ！いい腕してるな？タイショー！ヒヒヒ…！」

カメラがジョーカーが見つめる方に向いたが、そこには棒立ちになり顔には引きつった笑みを浮かべたまま死んでいる寿司職人の映像が映った！

「ヒャー！AHHHHHHHHAA！この国のシェフ



た！サプライズ・ショーにこの俺がいねえと始まらねえだろ？・ヒヒヒヒヒヒヒ！まあ…待ってな！すぐにでもショーを始めてやるぜ？・ヒヒヒヒヒヒ！では！It's show Time！」

ジョーカーは紫色のシルクハットを深くかぶると、ステッキを構えながらそう言った！

## 狂宴2

「何だ？入試見たく…いきなり始まってんのか？」

切島はUSJの中に現れた黒いモヤから出てくるヴィラン達を見ながらそう言った。しかし、それは違った。

「全員、一かたまりになって動くな!!」

相澤先生の一喝により全員の顔が強張り…出久達は冷や汗を流した。相澤先生は出久達を見るとさらにこう言った。

「13号！生徒を守れ！」

「先生！あれは…」

「あれは…敵だ!!」

相澤先生の言葉にさらに出久達は身構ると、切島は大声で言った。  
「敵ヴィランン？バカだろ?!ヒーローの学校に入り込んでくるなんて！」

切島は頭を抱えながらみんなの心の内を代弁するかの様になう言った。出久は13号にこう言った

「先生、侵入者用センサーは…?」

「もちろん、ありますが…!」

「現れたのはここだけか…それとも学校全体か…」

「やはり…!先日の侵入事件もこいつらの仕業か!」

慌てる僕達をよそに黒霧は出久達を見るところ言った。

「13号にレーザーヘッドですか…。しかし、おかしいですね…?先日頂いた教師側のカリキュラムではオールマイトがここにいるはずなのですが…」

「チツ…どこだよ…。せつかくこんな大衆引き連れて来たのにさあ…平和の象徴オールマイトがないなんて…」

死柄木はイライラしながらそう言った。

「グワーツ！グワツグワツ！もしかするとマッドハッター達の方に行ってるのかもな!」

黒いモヤの中からペンギンと共に、大きなコンテナを手下達が担いで現れた。死柄木はペンギンの言葉を、他所に顔につけた手をの隙間から、狂気のこもった目で出久達を見るところ言った。

「子供を殺せば来るのかな?」

死柄木がそう言った瞬間!モヤの中から笑い声が響いてきた。

「ヒヒヒ……ヒャー!A——HAHAHAHAHAHAHAHAHAHAHAHA!」

出久はその笑い声に背筋がゾクツとした。その笑い声の主はモヤの中から現れると出久達に手を振りながら言った。

「ハジメマシテ!ヒーローを目指すガキ共!ジョーカーおじさんだよおおん!ヒャー!HAHAHAHAHAHAHAHAHAHA!」

ジョーカーは狂气的な笑い声をあげると出久達に向かってお辞儀をした。

「さてえー!今日はお前らもビックリする!とびっきりのサプライズがあるぜ!ヒヒヒ……!」

ジョーカーがそう言うのと、モヤの中から赤い布を被せられた物と共にトウフフェイスが現れた。

「おーおー!今回も手酷くやられたね!デントくん!」

「うるせえ!黙ってる!クラウン!つつ!」

顔を痛々しそうに包帯で巻かれたトウフフェイスはジョーカーに向かってそう言った。ジョーカーは笑いながら赤い布を被せられた物の近くまで行くところ言った。

「クフフ!ハービーの酷い顔をさらに酷くしちまったのは誰かなあ?ヒヒヒ……!」

ジョーカーは赤い布を掴むところ言った。

「さて!サプライズ!」

ジョーカーが赤い布をものから取ると、そこには大きな砂時計があった。しかし、その砂時計を見て出久は驚きの声をあげた。

「まさか……あの……砂時計の中にあるのは……!」

「その通りさあ?この砂時計に入っているのはあ?」

『バットマン!』

「う……嘘だ……なんで……!」

出久が絶望した声を上げるとジョーカーは言った。

「どおーだあ?とんだサプライズだろ?ヒヒヒ……!今のバツツイはク

ロック・キングの個性で止まってんのさ！ヒヒヒ…！」

砂時計の近くからクロックキングは現れるとベスト・ジーニストを投げ捨てた。

「ベスト・ジーニスト！クソっ！」

相澤先生はジーニスト見ると驚愕の声を上げ身構えた。

「さあて！バットマン先生が倒れたので、代打で俺様がお前らの先生になってやるぜ！ヒヒヒ…！ベイン！砂時計を引っこり返せえ！」

ジョーカーは楽しそうに笑いながら言うと、黒いモヤからベインが現れて砂時計をひっくり返した。

「ヒヒヒ…！さあて！楽しい授業の始まりだ！へへア！H A H A H A H A H A H A！さあて！さっさと席につけよオ？お前らあ？

私語厳禁だぜえ？授業中喋った奴は息の根を止めてやるぜ！ヒヒヒ…！これで二度とうるさくはできねえだろ？それに！授業が終わる頃にはよオ？お前らもバツツイも死ぬのさ！ヒヒヒ…！これほどのジョークはねえよな？

ヒャー！H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A！

ジョーカーは笑い転げながらそう言った。出久達はそれを聞いて体が強張り、すくんで動けなくなった。

「1時間目はボコボコにされる方法を学ぼうだぜ！ヒヒヒ…！ 野郎共！可愛がってやれ！」

『ヒヤッハー…！』

ピエロのメイクをしたヴィラン達が出久達に向かって走り出した。

「13号避難開始だ！学校に連絡試せ！センサーの対策も頭にある敵だ、電波系の個性のやつが妨害している可能性もある」

相澤先生は皆の前に出るとそう言った。さらに上鳴を見るとこう言った。

「上鳴、おまえも個性で連絡試せ」

「っスー」

上鳴は急に名前を呼ばれビビりながら、そう答えた。

相澤先生はそう言い残すと、ヴィラン達に立ち向かおうとしたので

出久はこう言った。

「先生は!?一人で戦うんですか!?あの数…それにジョーカー達もいるのに!個性がいくら消せるとはいえ…!イレイザーヘッドの戦闘スタイルは敵の個性を消してからの捕縛!正面からの戦闘は…!」

「一芸だけじゃヒーローは務まらない」

相澤先生はそう言うのと走り出した。

「13号!任せたぞ!」

相澤先生はそう叫ぶと跳躍し、広場へと着地すると…!

向かってきた手下のヴィラン達をなぎ倒し始めた!

『ぐぎゃあああ!』

手下のヴィラン達は瞬く間に捕縛されていった。その光景を見て、出久達は目を丸くしながらこう言った。

「すごい…!多勢に無勢だと思ったけど…!多数対1人こそ…!先生の得意分野だったんだ!」

「分析してる場合じゃない!早く避難を!」

分析してる出久に対して飯田はそう返すと皆が入ってきたメインゲートへと向きを変えた途端!

「皆さん!伏せて!」

13号の一声に慌てて伏せた出久達の頭上を冷凍光線が通っていった。

出久達は慌てて起き上がるとメインゲートを見た。メインゲートはカチカチに氷漬けにされていた。

「嘘だろ!扉が!」

切島の悲痛な叫びが響き渡った。その瞬間!

「逃がしませんよ!」

出久達の視界を黒いモヤが包み込み始めた。

「初めまして、我々は敵<sup>ヴィラン</sup>連合。僭越ながら、この度ヒーローの巣窟: 雄英高校入らせて頂いたのは、平和の象徴であるオールマイトを亡き者にする為に参りました!」

黒霧の言葉に体がすくんで動けなくなった出久達。黒霧はそれを気にせず喋り続けた。

「本来ならば……ここにオールマイトがいらっしやる筈なのですが、何か変更があったのででしょうか？まあ……構いません。それとは関係なく……私の目的はこれ……」

BOOOM!

SKLIT!

「その前に俺達にやられるって事は考えてなかったか!？」

爆豪達の攻撃が黒霧に食らわせられる!しかし、黒霧に直撃したがダメージの喰らった様子もなくこう言った。

「ふう……危ない。そうでした生徒とはいえ……優秀な金の卵には代わりありませんでした……。です……」

「みんな……下がって!」

13号がクラスの連中を逃がそうとしたのも、虚しく黒霧は個性を使い出久達の周りを、黒いモヤで覆い尽くすところ言った。

「散らして罠り殺します……!」

出久は黒いモヤに包まれていたが……。気を失い……次に意識を取り戻した時にはプールのある水難ゾーンだった!

出久は何とかしようとともがいたが……そのまま水の中へと落ちるしかなかった。水の中に着水した出久は、新鮮な空気を求めて慌てて水面へと顔を出すと息を吸った。

「プハア!」

出久は息を整えると辺りを見渡し、迫ってくる水タイプヴィランが居るのに気づいた。

「恨みはねーが!ボスの命令だ!死んでもらうぜ!」

出久は指に力を入れてそのヴィランに狙いを定めたが……!

「グハア!」

蛙吹によって蹴り飛ばされた。出久は呆気にとられると蛙吹は出久を担ぎ船へと泳ぎ出した。

「蛙吹さん!」

「緑谷ちゃん!早く船まで逃げるわよ!」

いつもの蛙吹の口調ではなく、とても慌てた様子だった。出久は蛙吹に抱えられ船まで向かおうとした瞬間!水の中から雄叫び声を上



げながら、あるヴィランが飛び出してきた！

「ガアアアア！」

それは、キラー・クロックだった！クロックは大きな口を開けながら、噛み付こうと出久に迫ってきているのだ！慌てて出久は咄嗟にスマッシュをクロックに喰らわせた！

「グガア！」

クロックは少し吹き飛ばされるとまた水の中へと潜っていった。

出久達は何とか無事に船へと、たどり着いた。そこには先に助けられた峰田が何やらぶつぶつと呟いていた。

「カエルの体ってヌルツとして…デカくて…なんか…」

そんな事を呟く峰田はぶん投げられていた。

「あのヴィランってまさか…」

「ええ…どうやらゴツサムのヴィランみたいね」

「嫌だアアア！まだ死にたくねえよオオオ！」

出久達がそう話し合っている間にも船の周りから、チク…タク…と時計の音が聞こえていた。

「ガアアアア！ソナトコロニ逃ゲテモムダゼ！船ヲ沈メテ！オ前ヲヲ食ツテヤル！グゲツヘツヘツヘ！」

クロックの不気味な嘲笑い声に出久達はゾツとした。出久は様子を見ようと水面を見るとサメの背鰭のようなものが見えた！峰田はそれを見て叫んだ！

「なんでえ！プールにサメがいるんだよオオオ！」

「あれもヴィランか!？」

サメの背びれはどんどん船へと近づくと…！突如！飛び上がり姿を現した！それはキング・シャークだった！

キング・シャークは船体に齧り付いた！

「ガウウウウ！」

キング・シャークは頭を降ると船もグラグラと揺れ、その度に峰田は叫び声をあげていた。キング・シャークは船体から口を離すとまた戻ってきた！

「シャーク・魚雷イイ！」



## 狂宴3

山岳ゾーン（八百万チーム）

「皆さん！バラバラにならず！かたまりましょう！」

八百万の言葉に上鳴達はヴィラン達を見ながら身構えた。

八百万達の様子を見ながら黒いモヤの中からキューショナーは大きなコンテナとともに現れると両手を叩きながらこういった。

「俺の担当は3人か…いいぜえ？しつかり教え込んでやるよ…！俺の電撃の恐ろしさをなあ！ガハハハハハ！」

キューショナーは手をバチバチさせながらそういうのだった。

VSエレクトロキューショナー&???戦

倒壊ゾーン（爆豪チーム）

「オラア！」

爆豪は手を爆破させながら雑魚を切島と共に倒していつていた。

「もつとかかかってこいや！クソが！」

爆豪は悪態をつきながらさういうと笑い声が聞こえてきた。

「おーおー威勢が随分いいじゃねえか？」

「えらく生意気なガキだな？目つきもすげーぜ！」

爆豪はその声がある方を睨みつけながらこう言った！

「何コソコソしてんだ！ああ？さっさと出てこい！ぶっ殺してやる！」

爆豪の視線の先は、3人のヴィランがいた。

1人目は赤いマスクを被り…不気味に爆豪達を見ていた。

このヴィランの名前はレッドフード！

個性は…???

その次は、顔に緑のマスクをかけ、背に大きな鏡を背負っていた。

このヴィランの名前はミラーマスター！

彼の個性は鏡！何でも反射させたり、幻影を操ったりできるぞ！

鏡の中にも入ることが出来るすごいヴィランだ！

ミラーマスターの横にいるヴィランはコスチュームに大きな渦巻きが書いてあるヴィランだった。

このヴィランの名はトップ!

彼の個性は回転!指が少しでも触れたり、体液が付着したものを回転させる事のできる個性だ!

トップはそこら辺の石ころを1つ拾い上げると石を高速回転させながらこういった。

「さて、授業始めんぞ?まずはお前の汚え口をなおす方法からだ」

トップはそう言うくとミラーマスター達ともに爆豪たちに襲いかかるのだった。

VS トップ&ミラーマスター&レッドフード戦

火災エリア

そこには数人のヴィランに囲まれる尾白の姿があった。

「ツツツ……」

尾白は構えながらヴィランたちを見ていると天井近くに黒いモヤが現れると中からファイヤーフライが飛び出してきた!

「グワーツバハハアバハー!やつと出番だア!」

ファイヤーフライはガラガラな声で笑い声をあげると尾白を見下ろしながらこういった。

「俺の生徒は1人だけか?まあいい!小僧!お前は猿の丸焼きを見たことがあるか?俺もあんまりねえが!だーかーらー!今から見てみようじゃねえか!グワバハーハバハー!」

ファイヤーフライはそう言うくと尾白に火炎放射器を向けるのだった。

VS ファイヤーフライ戦

「さあー!始まったぜえ!我らがスーパーヴィランが送る特別授業だ

!瞬き厳禁だぜ?瞬きする間に殺されちまうからな?ヒヤー!HA

H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A

H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A H A

USJの内部に設置されたスピーカーに繋がるマイクを持ちながら

らジョーカーはそう言った。

「皆…バラバラになっちゃったみたいだが…。まだこの施設内には

いるようだ」

障子はそう言うのと麗日達は胸をなで下ろした。しかし……！麗日は広場にいるジョーカー達を見てさつと身構えた。ジョーカー達は、相澤先生の相手を手下に任せて、自分達はそれをただ傍観しているのだった。

（相手はあのバットマンを倒したヴィラン！どうすれば！）

13号は焦りながらどうにか生徒達を避難させようと考えていた。すると……！氷漬けになっていた入口が音を立てて溶け始めた！

「な？なんだア！」

瀬呂はびつくりしながら入口のゲートを見た。入口が溶け切るとそこから1人の男が現れた。

「ケツ……！フラッシュの野郎！こき使いやがつて！」

入口に立っていたのはローグスの1人……ヒートウェーブだった！

「あ？なんだお前ら？この学校ヤツらか？」

ヒートウェーブはそう言うのと、ヒートガンで葉巻に火をつけるとふかした。

「あ……あなたは？」

飯田は恐る恐る聞いた。ヒートウェーブは飯田を見ながらこう返した。

「俺か？あー……英雄じゃねえがあ……？お前らの敵ではねえってことは確かだな……。俺の敵はあの広場にいる連中だからな？」

ヒートウェーブはそう言いながら、ゆつくりと飯田達に向かって歩き出した。

「俺はあ……ある奴の前では悪役だがア……！今回はヒーローだ！」

ヒートウェーブは頭にあったゴーグルをつけるとそう言った。すると、広場からまた冷凍光線が放たれた！ヒートウェーブはそれを見ると声を荒らげた！

「オラ！どけ！ガキ共！」

ヒートウェーブはヒートガンを構えると引き金を引いた！ヒートガンから高温の熱が発射されると冷凍光線を相殺した！

「へっ！この冷凍光線には心当たりがあるぜ！ゴツサムの冷凍男だ

なあ？ワールドが偉くアンタに敵対心を燃やしてたぜ！」

ヒートウエーブは笑うと広場の方を見ながら叫んだ！

「ええ？そうだろ？Mr. フリーズさんよお！」

ヒートウエーブの個性は熱波だ！

熱を操作できる！電子レンジと同じようなことも出来るぞ！内側から熱を伝えることも可能だ！

ヒートウエーブの視線先にはフリーズが冷凍銃を担ぎながらこちらを見ていた！ヒートウエーブとフリーズとの小競り合いを見ていたペンギンはこう言った。

「ああ？アイツはセントラルとこの放火魔じゃねえか？なんであいつがここにいる？」

「バットマンの懸賞金につられてきたか？？しかし、もう遅い！」

ほかのヴィランたちもそう言うと、ヒートウエーブは眉間に皺を寄せながら叫んだ！

「懸賞金かなんだか知らねえが！俺は金なんていらねえし！コウモリ野郎が死のうがどうでもいい！」

俺がここに来た理由はなあ？オズワルドのとつつあんよオ？

ローグス：いや！俺の仲間を取り戻しに来たんだよ！

お前らが連れ去ったんだろ？ブーマランに！ウエザー！トップにパイドパイパーの奴まで！さっさと返した方が身のためだぜ？俺のヒートガンで溶かされたくなければなあ？」

ヒートウエーブの様子を見てジョーカーは笑いながらこう言った。

「ヒヒヒ：！放火魔がもう一人現れたか！ウチの放火魔とどっちが強いかみてみたいなあ？Hey！Mr. 黒霧！頼むぜ！」

「ええ：：わかりました」

黒霧はモヤを発現させようとしたが：ヒートウエーブがそれを見てこう言った。

「ハッ：させるかよー！」

ヒートウエーブはヒートガンを構えると引き金を引いた！

すごい熱が死柄木達を襲った。

「グオッ！」

「ツツ…！なんだあいつ？殺してやる…！」

死柄木は忌々しそうにヒートウエーブを睨みつけると向かっていった。しかし…ヒートウエーブはさらに熱量を上げると言った。

「俺に近づこうってのか？近づく前にお前を消し炭にしてやるよ！」

ヒートウエーブは死柄木を狙い続けようとしたが、ペンギンは死柄木の前に立つと傘を広げて言った。

「小僧！後に入れ！」

「そんなもん防げんのかよ…？」

「グワーツ！グワツグワツグワツグワ！お前に見してやるよ！俺様の強さってものをな！」

熱はペンギンを襲い始めたが…。ペンギンは慌てる様子も無く傘で熱を受け止めると持ち手を引き跳ね返した！

「グオッ！」

跳ね返されたすごい熱が相澤を襲った。

「グワーツ！グワツグワツグワツグワ！どうだ！参ったか！これがペンギン様の強さだ！」

シルクハットのつばを目深にかぶるとペンギンは笑い声をあげた！

「クソツ！オズワルドのとつつあんの傘は特別製だっ…てことを忘れてたぜ…？」

ヒートウエーブは悪態をつきながらそう言ったが…自分の体に異変が起きていることに気づいた！

「うおっ？なんじゃこりゃ！」

片足が黒いモヤの中へと引き釣りこまれていった！

「ちくしょう！これがトリックスターが言ってたやつか！クソ！抜けねえ！うおわあああ！」

ヒートウエーブはそのまま黒いモヤの中へと取り込まれていった。

ヒートウエーブが黒いモヤに取り込まれると同時にMr.フリーズもモヤの中に消えるのだった。

―緑谷 side―

キングシャークの攻撃を喰らい、緑谷たちが乗る船は徐々に沈み始めていた。

「うわあああー！」

峰田は泣きながら水面を見て喚くと、クロックとキングシャークはそれをニヤニヤと笑いながら見ているのだった。しかし、ある水の中にいるヴィランの1人が水を操作し、剣のようにすると船を切断した！

「うわー！」

緑谷はバランスを崩すと倒れた。水面では船を攻撃したヴィランは船の様子を見ながらこう言った。

「じれっただけだ……！さっさと終わらせちまおうぜ！ヒヒヒ！」

船を攻撃したヴィランは笑いながらそう言ったが……。次の瞬間！そのヴィランの目の前にはクロックが大きな口が現れた。

「え……うぎやあああー！」

そのヴィランはクロックに噛みつかれると、瞬く間に水の底へと引きずり込まれ、そのヴィランがいた所は真紅に染まった。周りのヴィランがその光景に絶句しているとキングシャークはこう言った。

「勝手な事すんじやねえよ……！子供の肉はよオ？もつと絶望させればさせるほどやわらかくなるんだぜ？」

峰田を見ながらキングシャークはいやらしく笑った。峰田はそれを見るとあまり事に失禁しかけてしまった。

「クソオ……どうすれば！」

「うわあああー！こっちに来るなあアア！」

緑谷が思案していると峯田は泣き叫びながら、頭のもぎもぎをクロック達に向けて投げ始めた。

「ヤケになっちゃ駄目だ！峰田くん！」

緑谷は峰田を止めると峰田は水面を指さしながら泣いた。

「ああ……なんて事を……！」

緑谷はそう言いながら水面を見てあることに気づいた。

(……誰も峰田くんのもぎもぎに触ろうとはしない？もしかして……警



戒している？もしかすると！)

緑谷は何か決心したかのように立ち上がるとまた水面を見た。

「オイ…：シャーク！ソロソロドウダ？」

「ちっ！気が早えな！テメーは！アイツらを食うならもう少し絶望させてからだろうが！」

「イヤガツタナ…！サメ野郎ガ！」

「なんだと？この両生類が！」

シャークとクロックが揉めているのを見て緑谷は決意すると立ち上がり叫んだ！

「ウオオオオオオオ！」

緑谷は叫び終わると跳躍し水面へ構えながらこう言った。

(かつちやんの感じで…！)

「死ねえええええ！」

「みつ緑谷…！マジかよ！ああ…！」

「ハッ！オレラニ食ワレニキタカ？」

「痩せてるガキか…あんまり美味そうじゃねえな」

クロックやシャーク…：峰田の言葉も無視し緑谷は構えたまま水面へと向かっていった。

(卵が…！爆発しないイメージ！)

緑谷は水面に近づくと叫んだ！

「De<sup>デ</sup>la<sup>ラ</sup>wa<sup>ウエ</sup>re<sup>ア</sup> S<sup>ス</sup>M<sup>マ</sup>A<sup>アー</sup>—S<sup>シ</sup>H<sup>シュ</sup>！」

緑谷の一撃でプールの水が爆発した！

緑谷はスマッシュを撃った後遺症で、指を骨折しながらも峰田達を見ると叫んだ！

「梅雨ちゃん！峰田くん！」

「ゲロー！」

梅雨は舌を伸ばしながら緑谷をキャッチすると、峰田と共に跳躍した。

峰田は梅雨に抱えられながらこう言った。

「なんだよ…：緑谷…。おめえ…：かけえ事ばっかしゃがって！オイラだって！オイラだってええ！うおー！ー！」

峰田はそう叫ぶと頭のもぎもぎをヴィラン達に向かって投げ始めた。

緑谷のスマッシュでプールには渦巻きが発生し、ヴィラン達を引き寄せ始めた。

「何！引きずり込まれる…！」

「なんだこれ取れねえ！」

「離れやがれ！」

「お前こそ！」

ヴィラン達はもごもごによりひとつの塊となり、そのまま大きな水飛沫を上げて吹き飛ぶのだった！

それを見て梅雨はこう思った。

（敵を一網打尽…！凄いわ！2人とも！）

梅雨はプールサイドに着地すると緑谷はすぐに立ち上がり、

「な…何とか！う…上手くいった！」

緑谷は息切れを起こしながらそう言うと言とプールを見渡した。プールにはひとつの塊となったヴィラン達が気絶していたが…。

しかし…緑谷はある事に気づいた！

「ワニのヴィランとサメのヴィランは…？」

緑谷がそう言うと言と突然！緑谷達の近くで大きな水飛沫が上がった。

「ガアアアアア！」

雄叫びをあげながら現れたのはキラー・クロックだった！

緑谷達はクロックを見るとみるみるうちに顔を青ざめさせた！

クロックは頭をブンブン振りながら叫んだ！

「獲物ノクセニイイ気ニナリヤガッテ！殺シテヤル！殺ス！噛ミ殺シテヤル！」

クロックが叫ぶ姿を見て緑谷はこう言った。

「まずい！まずい！まずい！あの一撃を食らって倒れないなんて！どれだけ強いんだ！」

緑谷は頭を抱えながらそう絶望した声を上げると、また近くで水飛沫が上がった！その水飛沫の正体はキングシャークだった！

「そうそう…！その絶望した声だ…！その声が聞きたかった！やつと

食べ頃だア♡」

キンググシャークはそう言うのと緑谷達に向かって走り出した！

「ソコカアアア！クソガキ共オオオ！」

クロックも緑谷達に向かって走り始めた。

「うわあああ！何とか！助かったと思っただのにイイ！」

「クソ！万事休すか…！」

「ゲロオ…」

緑谷達は絶望した表情を浮かべながら、向かってくるクロック達を見てそういった。

「ガアアアアア！」

「頂きマース♡」

「ツツツ…！」

クロック達が緑谷達に襲いかかろうとした瞬間！緑谷は咄嗟に目を閉じた…。しかし…いつまで経っても体食われることがなかった。

不思議に思い、恐る恐る目をゆっくりと開けると…。

「ガア…ア…アア…！」

「あ……………」

凍りついたキンググシャークとキラークロックの姿があった！

「な…何で？」

緑谷がそう呟くと後から雪を踏みしめる音が聞こえてきた。緑谷は後ろを恐る恐る振り返ると！そこにはC・コールドが立っていた！

「あ…貴方は？」

「あ？俺か？不本意ながらヒーロー活動中のヴィランだ」

コールドの言葉に緑谷と梅雨は身構えた。コールドはそれを見ると笑いながらこう言った。

「おいおい？ヒーローの卵が俺と戦う気かい？一丁前だなあ？ええ？俺はピンチなお前らを救ってやったのによオ？」

コールドはそう言いながらズカズカと歩みを進め、凍りついたキンググシャークの前に立った。

「だが、安心しろ！俺にはある心情がある！それは絶対に女子供には手を出さねえってこった！分かったか？それよりもだ…俺はコイツ

に用事があるんだ：：なあ？ ジョーズ野郎？」

コールドはキングシャークを睨みつけると、コールドガンを向けてこう言った。

「いいか？ 魚介野郎？ 今から言う質問には必ず答えろよ？ じゃねえとお前をノルウエー産のサーモン見たくカチカチに冷凍するからなああ？」

凍りついたキングシャークは目配せをしながら答えた。

「まずは誰が俺達の仲間を攫った：？ 答えろ」

「ジョ：カ：」

「ジョーカー？ あの道化師か？ あんな奴が俺らに悪さする力がある訳ねえだ：ろつと！」

「ガア！」

コールドはシャークのまだ凍っていない手にめがけてコールドガンを発射した！ 手は瞬間に凍りついた！ その手にコールドは足を置くところ言った。

「知ってる情報は正直話す方がいいぜえ？ 魚介野郎？ 俺の足がお前の手を粉々に砕く前になあ？」

「ツツ：：！」

コールドはそう言うのとゆっくりと体重をかけ始めた。すると、シャークの手にヒビが入り始めた。

「わ：：かつ：：た！ 話す：：！ 話すから！」

シャークがそういうとコールドはピタツと足を止めた。

「この：騒動：には：：ズ：ムが：：絡ん：：で」

「ズーム？ あのズームか！」

コールドまるで信じられないとも言いたげな表情を浮かべるとキングシャークを見た。

「あのクソ野郎は死んだはずだ：。なぜ生きてやがる？」

「し：：らね：：え」

「そうか知らねえか：。他に知ってるのは？」

「もうねえ：：！」

「そうか：」

コールドはそう吐き捨てる。キングシャークの体にコールドガンを押し当てこう言った。

「情報をくれたお礼だ。しっかりと凍りつかせてやる……。俺の仲間に手を出した事を凍りついた意識の中で精々詫びるんだな……？」

「やめ……！」

キングシャークの静止の声は聞きどけられず、コールドは引き金を引き……。キングシャークは完全に凍りついた。緑谷達はそれを見て絶句していると、コールドは緑谷達の方に向くとこう言った。

「んじや……。取り敢えずお前らを護衛するから……。お前らの友達がいる所に戻るか？」

コールドの言葉に緑谷はゆっくりと頷いた。コールドは面倒くさそうにコールドガンでプールを一瞬にしてスケートリンクの様にするとその上を歩き始めた。そして後ろを振り返るとこう言った。

「おい……。何してる？早くついてこい」

コールドの言葉に緑谷達は黙ってついていくのだった。

—————

く相澤 side

(クソっ！雑魚が多すぎる！コイツらを倒してもあそこにいる連中を倒せねば意味が無い！)

相澤はジョーカー達を見ながらそう思った。ジョーカーは相澤を見ながらこう言った。

「ヒヒヒ……。中々ガッツのある先生だねえ？気に入ったぜ！ヒヒヒ……！」

ジョーカーがそう言っているとトゥーフエイスが少し前へと出た。ジョーカーはそれを見てこういった。

「おおっと！ハービー地方検事殿が重い腰を上げたぜ？ヒヒヒ……。殺しちゃうのか？」

「いいや？ちがう……！」

トゥーフエイスは何やら懐を探ると相澤が戦っているヴィランに向けて投げた！

「ギャア！」

それはコウモリの形をした手裏剣だった…！

それに気づいたペンギンが傘をトウーフフェイスに向けようとしたが…！ペンギンは殴り飛ばされた！

「グギャアアアアアア！」

トウーフフェイスは服をつかむと脱ぎさると、中から現れたのは…！

「ヒヒヒ…いやつとだな？ダーリン！待ちわびたぜ？テメーがその砂時計で寝てる奴と入れ替わっているのはお見通しだったぜ？ヒヒヒ…！」

「これ以上お前達の好きにはさせない…！」

バットマンだった！

ヒーローの反撃が始まる…！